Dec. 1894
no. 405

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百五號

社説

大日本海外教育會

隨感

年の終りに眞の齡を感す ⊙吾神の降誕 ⊙監督ウイリアムを懷ふ ⊙佛書大文章の恨悶 ⊙思想を讀むの眼識 ⊙小哲學 ⊙厭世の情もとより有り ⊙歷史僻 ⊙佳人と大丈夫 ⊙長所即短所 ⊙打死は所詮失敗に似たり ⊙保守黨の男兒 ⊙兒童が無念の淚 ⊙異邦觀風の覺悟 ⊙默契のよろこび

女學

孤女學院の特別資本 ⊙女生の高等修學 ⊙遠征の將士家を懷ふ ⊙戶内隱微の潜勢力 ⊙意中の人 ⊙家に在るもの家を忘る ⊙鐵血宰相の今日このごろ ⊙可憐女と自ら名づけし人 ⊙某女があわぬ苦と云ふとに付き ⊙年の終りに數を回顧す

評論

事業論 ⊙國家及帝室に關する基督教 ⊙日本風景論 ⊙同じく評（靜淵）⊙近松門左衛門 ⊙札幌基督教會歷史

爛煥

なみだの記（さし子）⊙樹だま集（孤衾）泡鳴子 ⊙石切り（某戲作）⊙博物館を觀るの記（無光）⊙友を失なひて秋の月を觀る（浦のなみ子）

片々

京濱女學校連合市況 ⊙園てる對マクリーン ⊙婦人矯風會役員改撰 ⊙教育時論が女子教育 ⊙島根縣師範校女子部 ⊙普國改正女子教育案 ⊙近時の佛界を懷ふ ⊙大日本海外教育會

明治二十七年十二月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

旅行中 歳暮年頭の欠禮を謝す　巖本善治

當號目次

社説
大日本海外教育會

随感
年の終りに眞の齢を感ず ◉吾神の降誕 ◉監督ウイリアムを懷ふ ◉佛書大文章の恨悶 ◉思想を讃むの眼識 ◉小哲學 ◉厭世の情もとより有り ◉歷史僻 ◉佳人と大丈夫 ◉長所即短所 ◉打死は所詮失敗に似たり ◉保守黨の男兒 ◉兒童が無念の涙 ◉異邦觀風の覺悟 ◉默契のよろこび

女學
孤女學院の特別資本 ◉女生の高等修學 ◉遠征の將士家を懷ふ ◉戸内隱微の潜勢力 ◉意中の人 ◉家に在るもの家を忘る ◉鐵血宰相の今日このごろ ◉可憐女と自ら名づけし人 ◉某女があわぬ苦と云ふとに付き ◉年の終りに數を回顧す

評論
事業論 ◉國家及帝室に關する基督教 ◉日本風景論 ◉同じく評(靜淵) ◉近松門左衛門 ◉札幌基督教會歷史

爛煥
なみだの記(さし子) ◉樹だま集(孤雲) 泡鳴子 ◉石切り(某戲作) ◉博物館を觀るの記(無光) ◉友を失なひて秋の月を觀る(浦のなみ子)

片々
京濱女學校連合市況 ◉園てる對マクリーン ◉婦人矯風會役員改撰 ◉教育時論が女子教育 ◉島根縣師範校女子部 ◉普國改正女子教育案 ◉近時の佛界を懷ふ ◉大日本海外教育會

大日本海外教育會

我儕同志者大に方今の時世に感ずる所あり茲に大日本海外教育會を設立し先づ朝鮮國民の爲に教育を施し以て國家獨立の基礎を堅立せむとを期す同感の諸士冀くは本會の主旨を贊助し多少を論ぜず金員を寄贈し本會の目的を成就するを得せしめむとを。

尙ほ會憲主意書等御望の方は御申越次第早速送呈可仕候

東京麴町區三番町七十九番地　假事務所

大日本海外教育會憲法及會則

◎憲法

第一條　本會は海外に教育を施くとを目的とす

第二條　本會に役員五名評議員十名を置く

第三條　會員は評議員を撰擧し評議員は役員を撰擧す

但し評議員は役員を兼ぬるとを得

第四條　評議員は本會の事務大綱の議定に與かるものとし其任期は二年とす

但し評議員は自から補欠撰擧を爲すとを得

第五條　役員は本會の事務を執行す

第六條　役員は會長、副會長、幹事各一名及會計二名より成り任期は四年とす

第七條　會長は事務を總理す

第八條　副會長は會長事故ある時之に代る

第九條　幹事は會長を補佐して事務を處理す

第十條　會計は本會の經濟を修理す

第十一條　本會の憲法は會員四分の三以上の同意を經ざれば改正するとを得ず

附則

本會は最初朝鮮國の教育に從事す

◎會則

第一條　會員たらんとする者は會員の紹介により會長の承認を經べし

第二條　會員は一年三圓以上出金の義務あるべし

但し本會より特に推擧したる者は此限にあらず

第三條　本會の目的を贊助し應分の盡力を爲すものを會友とす

第四條　每年一回會員の總會を開き一年間の事務會計を報告すべし

但し會長は臨時會を招集するとを得

第五條　會則は會員多數の同意によりて改正するとを得

明治二十七年七月

發起人兼假役員

會長　押川方義

副會長　本多庸一

幹事　松村介石

會計　原田助

會計　巖本善治

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百五號

明治二十七年十二月二十五日發兌

社説

大日本海外教育會

茲に有志、大日本海外教育會の組織を公衆に披露せらる。其の告白文なるものに云く、

夫れ、國家獨立の根柢は國民精神の獨立にあり、國民開明の基礎は各人教育の發達にあり、故に先づ國民世界日進の智識を得、文明の學藝を修め、道義を明らかにし、博愛の精神を懷き、天命を畏れて自重嚴莊の氣象を養ふと懇切なるに非ずんば、眞誠に、長久に、邦家の獨立を維持せんとは難しとす。今や、帝國朝鮮をして眞乎獨立の基礎を固ふし大に革進する所あらしめんとするに方りては、則ち亦大いに之が教育を振張し之が精神を修養せざる可らざる也。抑そも東西歴史を別にし、隨つて文化の態趣を異にす、兩々各發達する所あり、彼我互ひに特長を有し亦偏失を存す、當に相抱着して以て圓滿完全の美を成すべき也。然るに今や西洋大に東洋に待ち、東洋亦大に西洋に得る所あらんとす、方さに是れ東西相會して文化一新するの機勢にあらずや。而して、大日本帝國此期に際するの天職は極めて光大莊重なり、即ち東西の文化を合成し世界の大道を發揮せざる可らず、即ち日東第一の聖地より起つて靈化したる新文明を宇内に布及せざる可らず、眞とに是れ海外に教育を施く可きの使命を負ふもの也。是を以て我儕今方さに朝鮮國現時の狀態に同情を表し、其教育の爲に懇ろに計畫し、只管らに該國民の心靈を開導し、其國力を涵養し、其國粹を啓發し、眞に善良强健なる一國獨立の基礎を育造せんとを期圖す。是れ我儕が　今上皇帝當今の　勅宜を奉躰し、其最とも任ずべきの方面に盡忠する所以なり。乃ち茲に大日本海外教育會の組織を公衆に披露し、先づ朝鮮國に於て事業の開始を爲さんとを告白す。冀わくは、四方同念の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

君子、惠然として贊同を情を寄せ、此會抱負の在る所をして速かに成達徹底せしめんヿを。

嗚呼、これ有志、海外に向つて博愛の仁を爲さんとする也。其志美なり、其事善なり、而も、國光を顯揚するヿ、亦極めて大ならんとす。　且つ聞く、此會第一着手を下す所は、朝鮮にありと。夫れ、朝鮮は、今や帝師の援助によつて、辛ふじて獨立を維持し、井上公使の顧問建策によりて、漸やく反正の効を揚げんとすと雖ども、該國腐敗の病毒は、膏肓に入り、區々たる外部の醫療を以て之を健強ならしめんとは難し。況んや大いに之をして振起せしむるをや。應さに、其の中身に向つて大革新の要素を投下せずんばある可らず。之れ豈に國人個々の敎導開發を旨とすべきに非ずや。

天皇　宣戰の　勅は、帝國臣民をして、各箇の權義の許す所に全力を獻げしむ。即はち、吾人各自は、其の尤とも任とすべき所ろに趨り、以て奉公緩急の用を盡すべき也。今まや、大纛は遙かに廣島に進み、同胞の將士は、遠く異域の積雪中にあり。凡そ、軍者は、軍に於て、其生命を献ずるが故に、文者も亦た斯文に於て、其全身を犧牲とせざる可らず。今夫れ、朝鮮は、眞乎の治安、甚深の改革を要求するヿ切なり、正さに是れ敎育開導を緊要とするの時節にあらずや。有志、固より之が求めに應ぜざる可らず。

此時に方つて、此會の計畫あり。吾人は、頗ぶる其の適當にして且つ有益なるヿを信ず。而も、題して、海外敎育會と稱するものは、豈に抱負の遠大なるものあるにあらずや。但だ夫れ、抱負の遠大なるものは、事業の着實ならんヿを要とす。此計畫や、單に時中機會の觸合によつて燦爛の光を放發するのみにあらず、精神、長久に貫徹し、氣力、永遠に伸張し、たとひ最初に於ては、聲聞に微々たりとも、必らずや帝國博愛の精神界に、劃然として一新紀元を印すべき深刻なる形跡を遺さゞる可らず。

蓋し、大日本、東西二洋の中央に立ち、古今兩世界の文化を綜合し、立國二千六百歲、君臣一躰四千万の一大國家をあげて、地球東方に於て大ひに動かんとするの今日、則はち世界の舞臺に上る所以のもの、正に昭々たる使命の其が上に攝理せらるゝヿを識認すべからずや。想ふに、個人に特色あるが如く、國家にも亦之あり。此特色や、世界圓滿の進歩に對し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て必須缺く可らざる所ろのもの也。故に、たとひ、古來幾十の邦あり、宇內種々の文明ありと云ふと雖ども、今にして大ひに日本帝國の殊特なる供給を待つにあらずんば、則はち完可なることを得ざるものあらんとす。之れ、日本帝國が、方今世界の舞臺に上ざる可らざる所以、世界が其の顯出を要めざるを得ざる所以なり。

夫れ、淺輕なる大言壯語は、一厘の價値なし。然れども、固陋にして偏狹なる消極的の退守は、其の着實の名の下に隱るゝを以て誤まらるゝこと尠なからず。開國新日本の氣魄をもて、東方大動せんとするの今日に方り乍ら、國是を消極の方針に取らんとするものは、惣べて君國を愛するの所以にあらず。又單に治域護國の小成に安んじ、僅かに東洋に率先するのみを理想とするものは、未だ大ひに國粹を發揚するの所以にあらず。日本は、應に其の得たる所ろのものを以て全世界に臨むべし、其の殊特なる天職を果して宇內の公けに奉ずべし。何んぞ止だ吾國と云はん、何んぞ止だ東洋と云はん、須からく、亦西洋諸國の爲めにする所ろあるべき也。吾人は眞乎に斯の如く感ず。況んや、東洋諸國は、吾帝國の啓導を待たずして、夫れ何れにか倚らん。更に況んや、かの朝鮮國の如き、既に全たく吾帝國に委賴せるに於てをや。言ふこと勿れ、朝鮮國教育事業の至つて難からんとすることを。事の難易は最早や問ふべきにあらず。たとひ何如に至難なりとするも、其難事業は、既に吾國民の擔當せざる可らざるものとなれり。吾等、更めて之を考究し、而して後ち初めて之に着手すべき餘暇あることなし。日本帝國は、既に朝鮮の爲めに此を擔任し、以て吾國民に之を分擔せよと命ずる也。有志、安くんぞ身を挺して其命を聽かざる可けんや。

念ふに、海外教育の事業たる、其抱負の極めて遠大なるが故に其用意の至つて質實ならんことを望む。其の前途の甚はだ長久なるが故に、其着手の尤とも堅固ならんことを望む。冀はくは、一時に煥發して、一時に消滅することなく、發起の精神、金石に徹して、万古、日本の國是に一進化を刻まんことを。如此き精神は、涙と血とにあらずんば潤ほすこと能はず、如此き事業は、骨と膽とにあらずんば支ゆること能はず、如此き同志は克己と赤誠とにあらずんば結ぶこと能はず。吾人は、此會計畫の旨とする所ろに熱贊するが故に、該發起者及び贊同者の猛

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

省を要むるヿ太はだ切なり。

隨感

○年の終りに眞の齡を念ず

年のくれに、つく〴〵と生命の成長と云ふことを念ふ。春、帝の一月より、追次、十二の月を送り、一歳の終末に臨みて、俄然として「本我」の內顧を爲すと、こゝに三とせ、年々、大率ね異なるヿなし。而して、我は何如んの成長を爲せしかとすれば、漠として取とめなし。深く人生の長久なるヿを信ずといへども、若し眞に成長するヿなかつせば、長遠悠久なるも、はた何の味わひあらんや。黃金を增して成長せりと感ずる人は事むしろ易し。邸宅を大きやかにして成長せりと喜こぶ人は事亦た易かりなん。所云る名望の擴張、事業の伸達など以て成長の觀念を滿足せしめ得べくんば、世上落寞の今日といへども、豈に大悅喜の人尠なしとせんや。若し夫れ、身を悠々たる天地の中央に置き、心を終始不變の大道に安んじ、肅然、無上至尊の大壇下に蹲踞して以て、己が齡ひ幾そばくぞと考がえ、「汝よく成人したり」の御聲を聞くヿあらば、自から省りみて、成長の意識に安んずる所ろあるヿを得ん。不思儀なるは、肉に老ひて心に彌よ壯んなる人、又、肉わかくして、心甚はだ老ひたる人、錯雜混淆して、一見俄かに判じがたきの爲躰これ也。憾むべし、洛陽二枚の田、なまじひに衣ろもを重ねて、寒生のおひ立ちを妨たげ、青年惜しむべし早くして木石と化す。嗚呼、舊年を送りて新年を迎え、一歳を加えて眞に成長の意義を味はふ人、抑そも世上に多きや如何に。われは、就て敎を乞わんとするヿ切なり。

○吾神の降誕

道、肉躰となりて我儕の間に寄る」と。今茲、主降誕祭に臨みて、いよ〳〵此の高妙神聖の福音を念ふ。夫れ、上帝は、最と高きに座わして、嚴そかにして尊とし。吾等、其の御德を懷ふに、妙にして且つ漠たり、幽かにして而も微なり。吾等は、たゞ基督に於て、顯然に、明晰に、直接に、之を念慕するヿを得るなり。基督は、如此く、吾等が、神に於ける觀念の悉とく形を取りたるもの也。凡そ神として崇宗すべき物て

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

の高德は、皆な玆に顯照する也。これを以て、吾等が、基督に對するの觀念は、日ごとに崇高となり、年ごとに美妙となる。常に進むことを覺ゆるも、豈に退ぞくことあらんや、常に崇むることを增すも、豈に尊ときことを減ぜんや。最高の觀念は、基督なり、最美の理想は、基督なり、神に於ける觀念理想の現實の形は、基督なり。吾輩の理想にして、退歩すべからずば、豈に基督に對するに於て、退ぞくことあらんや。淚、目に潤ほふ每に明らかに、基督を見る、血、胸に湛ゆる每に、溫かに基督を感ず、たとへば、赤手、大洋を泳ぐが如し、泳ぐこと彌よ遠くして、基督の彌よ遠きことを感ず、たとへば、五尺、大山の麓に仰ぐが如し、仰ぐこと彌よ高くして、基督の彌よ高きことを感ず。彼は、人か、人也。彼は、神か、神なり。彼が、由來と、彼が區域と、豈に輕々しく斷定すべけんや。吾輩の日夜に工風鍛鍊する所ろのものは、之に神戀精慕して、其の衣の御裾に觸れ、其の御足の塵を踏み、彌よ近づきて、彌よ伴隨せんとすることは是れ耳。此に於てか、同行の友を待つこと切なり。凡そ、彼を崇拜し、彼に歸依するものは、皆な床しきことを覺ゆ。彼に敵せざるものは、皆な彼に歸するものなり。主よ、主よと口にて叫ぶもの、其の實行なき故、醜しと雖ども、亦た憫れむべし。神子々々と學理的に論ずるもの、心の經驗を重んぜざる、惜しむべしと雖ども、亦た同窓の友にあらずや。吾輩は、すべて此等に異論あることなし。たゞ實地に苦練して、尤とも近く彼に近づき、尤とも嚴そかに彼を崇むるものを重しとして之に兄事せんとす。あゝ、クリスマス。年々に、其の新らしき光を與へて、吾輩に得せしむる所ろのもの多きことを感謝す。

○監督ウイリアムを懷ふ

監督ウイリアム、京を去りてより既に一歳を過ぐ、頃日の起居何如におはすらん。秋風孤木を拂つて寒月冷やかなるの夜滿胸にわかに熱して斯人を懷ふこと切なり。先生が去年、都を去るや、忽然として姿を沒くしぬ、人のざわ〳〵として送らんことを嫌ひてなり。ことし亦た何の日に忽然として歸り來ますらん、彷彿として神容に接するの情動いて止まず。首を長ふして、白髮鶴姿の老先生を想像する也。憶ひ起す、粗朴狹小の室、朝々夕々の祈り斷えず、時あつてか、朗唱詩篇を愛吟し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て、其聲樂のごとし。齡ひ古稀に達して、未だ嘗て娶らず、早く身を吾國に許して、故鄕を省せざると四十年。富貴を避けて、兒童を侶とし、貧賤を顧りみて、慈善を樂しむ。嘗て人あり、神學上幾多の疑問を抱ひて先生に近づき、問ふと屢ばなりしが、一たびも答辯を得ず。然れども、近接すると一年にして、釋然氷解し、了々として自得する所ろあるとを覺えたり。嗚呼、われに在りては、先生を念ふ毎に生面を開く。之に對して元氣幾度か快活す。

○佛書大文章の根悶

佛書を繙とけば、言章燦爛たり。文辭深邃たり。比喩高妙、情熱橫溢して、屢ば讀者を後へに瞠若たらしむ。而して、之を讀むと彌よ熟して筆者の根悶を覺とると彌よ增す。彼の、右より說き來つて未だ悉くさゞるものを、更に左よりし、左より說き來つて尙ほ慊たらざるものを、更に右よりし、上よりし、下よりし、俗よりし、脫俗よりし、表よりし、裏よりし、或は有形より明らかに見し、或ひは無形より暗に示さんとす、而して、尙ほ猶ほ言ひ足らざるものあり、說き盡さゞるものあり、滿足せざるものあり、更に筆を更ためて、更に說き起す。堂々風電を呼んで、捲き反へし、吹き返へし、或ひは變狀に、或ひは常態に、或は正面に、或は反面に、そも〳〵あらゆる言辭を盡して、何如にもして腔子裏底に得たる所ろのものを他に傳へんとす。而ふして、遂に得ず。遺憾煩悶の情、紙外に顯然たり。これ豈に熱情にして慈悲心ある大悟の人が屢ば筆を握りて而して尙ほ安んぜざる所以にあらずや。佛書を繙とくの士、恐らくは、此に同情なきとを得む。

○思想を讀むの眼識

思想を傳ふるに、言語あり、相貌あり、風采あり、行跡あり沈默あり、文字あり、圖書あり、音樂あり、彫刻あり、其他、際限なし。森羅せる万象皆な一々天地間の大思想を顯はすとせば、一個の小天地たる人も亦た思想の顯現にあらゆるものを使用せざらんや。此の使用の方の數多複雜なるは、即はち進步の徵候なり。左れど、文字を知らざるものは、文字によりて傳へべき思想を悟ると能はず。相術を知らざるものは、相貌によりて覺識すべき思想を讀むと能はず。このゆゑに、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思想は思想を看取し、有識は智識を吸入す。我に有たざるものは、遂に彼より得る所ろあらざる也。此をもて、心清からざれば、神を見るヿ能はず、念ひ信ぜざれば、愛に接わるヿなし。聖賢の書を讀むものは、聖賢を慕ふにあらざれば、悟りがたし、大人の心術を窺ふものは、大人を知るにあらざれば、要領を得むぢ。此故に、讀書百遍意自から通ずるは、百遍百回の智識を增して、增せる智識、層々段々に進み、漸やく以て意義を解するが如く、先輩の奥妙なる秘蘊を探らんとするものは、先づ以て大に自から脩むる所ろなかる可らず。襟を正さずして、古賢の書を讀み、偏曲利用の細心をもて大人の言行を見るとも、遂に眞髓に徹するヿあらんや。讀むべきの思想、事々物々に具わりて存す、警醒覺悟して之に臨まば進むヿ甚だ速かならん。

○小哲學

近頃ろ、哲學者の所論を聞けば、純然、推理に頼みて外に顧みざるが如し。眞一文字に理屈を推通して、觸るゝ所ろを悉とく罵倒す。其狀宛がら馬車馬の如し。余は之に問わんと欲す、公が所謂る哲學は、若く智性にのみ訴たへて、純理の規矩にのみ則とるべきものか。而して、智性の觀覺する所ろのものゝみ道理にして、他は、哲學の據つて以て重しとする所にあらざる乎。哲學なるもの若し斯の如く小ならば、何んぞ之を諸學の學とするヿを得んやと。

或は夫れ哲學者は勘定方か、人の取引の跡を始末するのみか若し夫れ哲學者は、簿記役か、經緯縦横の線合を工夫して之に記帳するのみか。もしくは果た千古の分らずや歟、只管疑問々々と稱して只だ疑問を吹聽するの人か。

○厭世の情もとより有り

あぢきなく、情けなく、やる瀨なきは、人の世の常なるかも。さて〳〵、人は愚かにして、淺ましきものかなと念ふ心は一日も去らねど、さりとて天道人情を疑がふのこゝろ、一寸もなし。たゞ〳〵先人同徹の事情に思ひあわせて、さぞや、廉潔の人は、世を不潔なりとして山林に逃れたく發心せしならめ、心よわき族は之に氣落ちして破心遁世を思ひ立ちたらめと察せらるゝヿの增し加わるのみ。然りと雖ども、幼な兒の無

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

邪氣にして親を慕ひ、心友の誠を開きて赤情をえめし、古賢聖人の堂々として理想の高德を行ふなどを思へば、世は現實にして、道は到る所ろに存ずるヿを認ため、只だ我の微力なるを憫れんで、獨り强ふするヿ切なる耳。花の笑ひ、鳥のうたひ、雲のたゞよひ、水の流るゝを見れば、天地はもとより迫まる所ろなきなり、超然として別に養なふ所ろあり、脫然として外に樂しむ所ろのものあれば、寬容裕々として、斷えず慰さむる所ろあつて存す、遂に悲淵に溺るゝヿなし。天を怨むに至ては、固より分外なり、豈にまた人を咎むべけんや。凡そ相對的の度に立つときは、俠も、情けも、怒りも、親しみも、未だ大ひに高しとすべからず。希わくは、心を修め、思ひを高うして、別に悠々たる天地に住はん哉。

○歷史僻

歷史を好むもの、稍もすれば古代遠方の事實をあげて例證とす。渠れの意中すでに定まる所ろのものあつて、而して後ちたゞ之を飾り、之を强むるに此事實を以てするは寧ろ可なりと雖ども、初めより之に據つて以て漸やく斷案を定めんとするヿの多きこそ馬鹿らしけれ。人事の歷史は大抵信ずべきものにあらず。たとひ、信ずるとも、當にすべきものにあらず。假りに、今日の評判が今日の新聞紙となり、今日の新聞紙が他日の歷史となると想へ、一々之を信ずるも愚なれば、之に據つて人事の師範とする如きは、更に馬鹿らしきヿにあらずや。活世界の事業は、時處位の適用を第一とす。今代今年、吾の如くにして生存するもの、古今東西に一人もなし、されば第一の判定は、他の何ものにか賴らんや。况んや、歷史の如き、僞り多く、誤まり多く、僻見多く、不足多く、現在と相違するヿの尤とも夥たゞしきものに於てをや、何の價値かあらん。

既に、歷史元來賴むに足らざるものたるヿを知つて而して後ち之に參考するときは、大ひに益あり。殊に、少年に取りては、理想敎育に力あるヿ、歷史の如きは尠なし。

○佳人と大丈夫

孟子曰く、天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行なひ、志を得ては民と之に由り、志を得ざれば獨り其

道を行なふ、富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、此を之れ大丈夫と云ふと。男兒大丈夫、當に斯の如く觀念すべし、莽鹵淺輕にして泛々として一生を消さんとするは、何の心ぞや。而して、大丈夫と伴侶すべき佳人は亦た女丈夫の貞心あるべし。「吾が人」をして屑々たる小人たらしめ了はんぬるは、何等の不貞ぞ。

○長所即短所

一身清健なる時、此身あることを覺えず、五躰爽快なるとき、此躰あることを覺えず、忽まち感覺して殊更に局部の重々しきことを識るの時、即はち是れ此の局部の常を失なつて病に入れるの時なり。半爪を缺くは、五躰あるよりも煩はしく、一指を傷つくは、百官の活動するよりも苦るし。惟ふに、心情の弱點も亦た斯の如し。得意の所ろ即はち失意、長所即はち短所、氣の付く所ろ即はち病のある所ろなるべし。

○打死は所詮失敗に似たり

戰場に出で、潔よき打死を爲すものあれば、人皆な感歎せずと云ふことなし。打死は、要するに敵に殺ろさるることにて、勝利を冀がふ戰の上よりせば、遂に負けたるものにあらずや。然るに、敵に負け、生命を失なひ、恨を遺して先づ戰場の露と散るも、人は見て、事業の失敗となすことなし。則はち能く武人の面目を保ちて、偉勳を立てたるものとして紀念せらるべき也。形跡上、所詮、失敗に屬したることを反つて成功なりとするは何の故ぞ。是れ奉公献牲の大義に勇み、死を決して敵を討たんとし、之が爲めに身を殺ろして責を盡したることを殊勝なりとすればならん。

彼の傳道者、基督の臣僕となり、上天の軍兵となり、各自其の所長をつくして聖旨宣傳の任を果さんとす。此時に當りて、世上俗物の狡險なるに敵しかね、正しく戰かつて反つて之れに倒され、事業の外面、形跡上に破壞して、所云る通稱、失敗とする所ろの事に出合わんには、抑そも、之を何とか言ふ。多少熟練せざるの故なりとするも、兵士、劍を揮つて之に練れざると何等の違ひぞ。偶然意外の出來事ありしに由るとするも、彈丸突然飛來つて彼の武人を倒せしと何の別ちぞ。要は、其の精神を察するにあり、考ふべきは、其の奉公献牲の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

主旨にあり。もし只だ傳道利他の高潔なる抱負により乍ら、單に其の武器の足らざると、其熟練の達せざりしとによつて、不幸、敵の爲めに倒されたりとせば、即はち是れ天軍の爲の戰死にはあらずや。

○保守黨の男兒

甚はだしき哉名の亂れたると。改進斷えて改進にあらず、保守亦焉くんぞ保守ならんや。千歳一時の幸機に際し、天與の恩賜眼前にある時、反つて畏縮して後難を怖れんとす、之をしも改進と云ふべきか。所謂る保守黨、從來男子多し。冀はくは、此機本色を打發して大ひに開進の經綸を施こすとあらんとを。

○兒童が無念の涙

一寸の虫にも五分の魂ひあり、幼な兒にも夫相應の議論なからんや。たとへば承知しがたきとに叱り懲され、辯じたきにも呂律まはらず、無念の涙ホロ〳〵と落して、「左樣でナイ」の一句を最後に泣出すなど、豈に大丈夫を恨殺するものにあらずや。人生の眞相こゝに盡す。世間五尺の人間中、滔々として此の境ひにあるもの算なし。嗚呼、誰ありてか之が爲に代言するとを爲すぞ。

○異邦觀風の覺悟

日本男子が其妻を呼びて愚妻と言ふに仰天し、既に愚かなる妻と言へり、之を遇するの方知るべしとて、則はち取つて以て日本婦人逆遇の例證となす。凡そ、外國人が臆測して他國の風俗を難ずるの論法は常に大率ね斯の如し。斯の如き觀察者は、愚兄、愚父などの稱呼を聞くに及んでは、更に幾回か喫驚すらん。もし豬生、豚息などと言ふを聞かんには絕倒すべし。

風習の異なるときは、先づ奇異なる感想を懷き、次に、奇異の感想に侮蔑の情操を加えて、單に其の慣俗の相異なるの故によりて、野蠻未開なりとす。下駄直しが手を使ふに、蒟蒻屋が足を使ふをもて下賤なりとし、車ひきが衣服を着くるに、酒男が素はだかなるをもて野蠻なりとするは、此類なり。西洋婦人、頸をしめて膚を見せず、日本婦人が胸をあけて、

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

乳房を出す躰などを見て、不開化極まる如く考ふれども、其の同國人の交際婦人が、宴會のはれ着に胸より上部を開くを正装として感服せり。腰を屈めて禮し、屢ば辭儀して拜するを可笑しと云へど、接吻は動物相嘗めるの遺風なるを忘れ。日本の通俗社會に種々の縁儀あるを冷笑すれども、鬼門坤神八卦うらなゐよりも更に數多く更に馬鹿々々しき迷信が西洋婦人の中に多くあるを思はず。

故に、外國の風習を見聞するものは、先づ風習の國によりて相異なるべき所以を覺悟し、此の相異なるによつて輕々しく優劣上下の品等を附すべからざるを覺悟し、初めより先づ敬重の意氣を以て之を思慮し、決して侮蔑嘲笑の感情を以て待す可らざるを愼しむべし。

凡そ、外國の風を觀るものは、皆當に此の心得あるべし。吾等日本人が、朝鮮及び支那の風俗を聞かんとするに當りても、應に先づ此の雅量あるべし。

○默契のよろこび

心にしめて先聖の御敎を味えば、幽旨やうやく明るくして、

歎美の念ひ禁じがたし。ひとり、此心を開きて尊前にさゝげ、情感互ひに通じて、万古の意氣自づからに長久なり。尊ときは、大敎祖の御さとり、人をあわれみし憐慈、木石にも感徹す。一とたび、此の大量に接近して、其が温たかき血脈に觸るれば、全身俄然として復活し、人生の光景忽まち一變す。誰か言ふ、希臘の詭辯と。詭辯は、これ世をあわれみたる論士が慰さめの説法より創まりしならずや。誰かいやしむ、佛敎の小乘、偶像と。もし衆生を痛たむの心切ならんには、忽まちにして、此邊の消息を解せんに。われは深く奇しむ、基督の心を得たりと信ずるの徒にして、偏狹薄情、一に何んぞ斯の如きやと。彼の佛僧の法施を乞ふを見れば、誰か同情の涙なきを得る。凡そ、世をあわれまんほどのものは、他の同志者が意氣のある所ろを感悟すると容易なるべき譯ならずや。雜々たり、酖々たる法界の攻擊は、そも〳〵たゞ義憤の致す所ろか、將た他の事故ある乎。後覺の晩生、寧むろに覺むる所ろあり、先聖の大旨茲にありと自得すれば、心胸爽然として悟樂つきがたし。陽明先生の詩に云く、悠々万古心、默契可レ無レ辯。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

孤女學院の特別資本

茲に有志者によりて先頃發起せられたる左の如き計畫あり甚はだ美にして有益なるものと信ずるが故に、女學雜誌は之に滿腔の同情を寄せ、出來べき助力を盡さんと欲す。其の計畫主旨書に云く、

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子敎育の精神によりて發起建設せられたるもの也。茲に創業三年の星霜を經て敎育學上の進歩なみ〳〵ならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用いて敎育上の實用に供ふべき餘裕あらざるに付、此上一層敎育上の整備を求めんに其便りを得ずとて、院長は太たく心を痛めらるゝ由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四才に達せり其の前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子敎育並に孤女立身の二つの事の爲めに、院外の特別經濟として資金供給の方を與へられんとを祈る。之が爲めに定むる所ろの憲法及び定則、左の如し。

憲法

一 茲に孤女學院の女學及び孤女立身の二事の爲めに殊に資金を募集し此資金に名けて孤女學院特別資金と云ふ。

二 此資金は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業に放資し其の收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。

三 此の資金及び其の收益は孤女學院尋常の生計費に使用するとを許さず。

四 收益の內二分五厘を以て孤女の賃銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

定則

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一　發起人は該資金管理者二名以上を撰擧し之に孤女學院長を加へ該資金の管理を託すべし。

二　發起人は評議員となり該資金管理者の協議に與かるべし。

三　評議員及管理者は永久在任し自己に代るものを自己撰定すべし。

四　茲に先づ資金一千三百圓を募集し、養蠶事業に放資することに定む。

五　右定則は發起人及管理者多數の意見によりて改正することを得べし

明治二十七年十一月

發起人

巖本善治　石井ちか　小鹿島筆　加藤とし
横井たま　田村武治　津田むめ　名出保太郎
小島きよ　青木まさ　平野はま　杉浦義道

管理人

大須賀亮一　此他未定

吾人は、本誌の讀者が、之に温かき同情を寄せて、分に應ずるの義捐を寄せられんことを切望す。本社は、樂しんで其の取次を爲し、且つ月々其の報告を公けにすべし。

女生の高等修學

近ごろの女生の通弊は、學問に熱心ならざるの一事にあり。之を數年前女學旺盛の頃ほひに比ぶれば、氣の抜けたるアルクホールの如く、燃力至つて弱くなれり。此は、第一に時勢の影響する所ろ、随がつて父兄其女兒に求むる所ろの深からざるなどの元因に由るは論なしと雖ども、女生當人の責めも亦た免かる可らず。

天地は眞理無盡藏なり、人の心、鏡となりて之を映つす。此の鏡、大小あり、方圓あり、厚薄あり、凸凹ありて、一々異樣の影を撮る。則はち、以て眞理の具滿大圓をうつす所以なりとす。

かの女生に映るべきものは、何ぞ。女生終身學ぶ所ろは、只だ之を家庭に應用し、之を婢僕に實行するのみのものか。女生元來、如斯き下等の鏡の外もつ可らずと定まれる乎。其の鏡、この外に磨くの用なしとせらるゝ乎。何んぞ輕ろんずることの甚しきや。

古へより、眞理多くは男子にのみ映されて、女子に映された

るは少なし。之なきにあらざるも、至つて闒々しきものゝみなり。もし、未だ開拓せざる地を荒野と云はゞ、取わけ女子が開拓すべき眞理の荒野は格外に廣かるべし。女性の眼、一層高く深く大きやかに着けられて、古來男子が大率ね見落したる眞理の局部之より發見せられんには、學理社會に一生面を開くこともあるべし。

左れど、人皆な天分あり、事情あり、何人も皆な純粹の學問をのみ爲すべきにあらず。況んや、女性大率ね家庭修理の義務を負ふを以て常とするが故に、之に對して一概に男生同樣の勉學を要むるにはあらずと雖ども、左りとて、今の如く學問熱中の精神衰ろへたるは痛歎すべきこと也。

たとひ、男生なりとも、高等の修學を爲すべきものは、自から少からざるを得ず。左れば、方今の時世に於ける女生にして、此類篤志の人の自から少なきは已むことを得ずと雖ども、日東著名の國、古來烈婦多かりしに、奮つて此に任ずるものの今一層增加せざるは、他なし、女生奮發の氣象隆々たらざるの致す所ろなるのみ。

語ばを寄す、學想豐富の女秀才。何んぞ、身を挺して、此の一大事業に終生を嫁せざるや。一個の紫女、數百年代の後生を動かすことを思へば、當今少數の熱心なる高等修學者あらば、以て能く一代の傾向を振起することを得べし。

たゞ惜しむ可きは、如此き篤志者が就學するに便利なる女大學の未だ存せざること是れ也。左れど、凡そ高等なる大學の出來するは、先づ高等なる學者若干が辛苦獨學して自から大成したるの結果なり。凡そ新たに起すの事業にして、初めより之が爲めに備はりたる便利なる組織あらんや。組織あるに至るに先だちて、先づ其人なかる可らず。

故に、方今普通の女學校を卒業したる女生にして、一層高等の修學を爲さんとするものに取りては、方法現在に具備せず、途絶えて進路のたよりなきやに感覺せらるゝなるべしと雖ども、凡そ新たに途を開くものは、何事に於ても、皆な然りと勘辨せざる可らず。如此き時には、精神先きだつて路を啓くなり、氣力、進んで方法を備ふる也。その外に賴よるべき所ろなきは、當然なり。

故に、此の精神氣力なきものゝ爲めには、全く方法なき也。精神氣力あるものゝ爲めには、方法餘りあるべし。世上篤志

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の女生、何んぞ大いに奮つて、盛んに之に勉めざるや。

遠征の將士家を懷ふ

遠征の將士家を懷はざる乎。其の懷はざるが如き所ろ、即はち尤とも懷ふの所ろ、豪笑の下た涙あり、磊落の底、情けをかくす。衣、薄く、雪白くして、半夜夢破れ、故鄉の天を望まざるもの何處にかある。星のまばたきするを詠めて、家人が憂ひのまなざしに射られ、兵士の可愛ゆきに感じて愛兒が笑顏を想ひ起す。室家それ何の引力ある。故鄉それ何の磁石力ある。吾を引くと切りにして、五躰異樣の電氣に打たる。一死もとより惜しむ所ろなし、死して魂魄の自由に遊ばんとをたのしむ。書に認ためて書きつくさず、初めより恨思を引出さじと制す。唇を噛んで默して忍べば、涙、腦後より湧き來らんとするを覺う。笑つて放吟し、壯んに氣勇の詩を朗唱すれば、篝火の影少しく明るし。强ひて、傍はらの人を召び醒まして、戲むれに快談すれば、天星いよ〳〵輝やき、夜色ます〳〵黑し。聲を太くして、涙を飲み、劍舞して、身のつらきを消す。故鄉の妻子、如今夢みる所ろいかん。

戸內隱微の潛勢力

猛けき人は剛强の事にあひて屈せず、反つて彌よ激勵すれども、切なる情けには、脆ろきと淡雪のとくるが如し。風吹かば、彌よ走つて之に向はん、波打たば、益す泳ぎて之を割らん、天下嘲罵の聲暴風の如くんば、之を木の葉の如く散らさん、四面楚歌の敵攻寄せなば、一騎面白ろく奮戰すべしなどほゝえまんものも、一と度び至情赤誠の爲めに打たるれば、頑骨解けゆるみて、電氣全身に徹す、たゞ〳〵情けが指揮に甘從して、其の命ずるまゝに事へんとするの外、餘念あることなし。一家のうち、人をして身を忘れて力を盡さしむるものは、かよわき幼な兒なるが、天下の大丈夫をして身を致して難に趣むかしむるに至大の勢力あるもの、反つて意外の邊に存するとあり。誰か言ふ、婦人家庭にひそみて、邦家公共の大事に關係するとなしと。見よ看よ、役々として世表に辛苦經營するの男子、遂に其が密かなる內助の刺激に依らざるもの、幾人かある。至誠、身を獻じ、無名、公けに奉じ、三食を減じて以て內顧の憂ひあらしめじと辛苦する賢夫人が意衷

の煩悶は、何如に丈夫の心腸を寸斷して彼が激勵の爲の潜勢力たるか。窓下遙かに天外を望みて、烈人の精神貫徹せよと祈る誠心は、豈に血あるものをして熱せしめ、涙あるものをして絶泣せしむるとなからんや。壯言大語の人を動かすは、風の葦に靡るゝに異ならず、新聞經綸の人を導くは、蜘蛛の巣の天に網するに左も似たり。凡そ、男子が奮然起つて身を投ずるほどに激熱するに至るものは、多くは此般薄弱の誘引ありしが爲めならず、家に秘密なる刺激ありしが爲めなると多し。嗚呼、婦人、國を傾むけ又國を興す、人を産み又た大丈夫を生かす、何んぞ、其の感化力の隱微にして且つ强大なるや。

意中の人

試ろみに代つて意中の人に告ぐるものは、世の情交なるものを慰さめんとて也。

其一

御身は吾が心の戸を開き其秘密を悉とく引出し之を自個の胸中にしかと抱きしめたる知己なり、多年愛を說きたれど其眞味を自覺せしめたる人は御身なり、心に所有して迚も現實には獲られまじと斷念せし賢夫人愛妻眞同伴の活人物として御身は最と近く吾が心に着合し玉ひたり御身を得て御身を吾が物とする間は他に何等の不足もなし、御身われを疑わずと信ずれば何如なる反擊に遇ふときもさびしからず、御身がわが意中の人なりと確かむれば天下の富人の如き心地して世に其富を示したく感ず、知られてはならねど又知らせたく、あらゆる觀望者に誇りて此は吾が戰勝の獲物なりと吹聽したき心地もあり、左れば御身もし反かば即日厭世家となり落心して生命なきものとなるべし、御身が形骸は遂に土となる故に今ま先づ土に委するの斷念を以て割愛放擲すべし、たゞ其の精神は何人にも分與するとを許さず、博愛は一人に對するものならず、聖愛は敵に對するも尙施こすべし、吾が御身に求むる所のものは此外に尙ほ一種の特色を加へたる至愛なり、願わくは此愛を寄せらるゝと長久にして、何如なる變遷に會ふも渝わらざるとを固信し、たとひ十年相見ずと雖ども信任寸毫も減ぜず、不斷念々して意中よ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

り分刻も離れず、さびしき時に相思ふてにぎわしく、悲しき時も相信じて慰さめ、孤然ひとりゆく時も連ありと思はなん。これに些さかも飾りあるべからず。

其二

吁、事今日に至る運なり命なり更に何を言はんや、強ひて放心すれども忘るゝに忍びず幾度か憶ひ起す。憶ひ起こして一念こゝに凝結すれば熱血潮の滿るが如く狂氣百躰に充溢す。忽然反思警然として自から省りみ是れ一種の利已なりと覺り靈能を激勵し猛然として邪想を破り斥ぞくれども、亦又道理ある辯解を添えて安らかに心頭に浮び來る。噫之に向つてサタンよ退ぞけと言ふべき限りのものなるまじ。斷崖を踏越ゆる一歩なれば墮落して身を殞ずと雖ども、崖頭に立つて相應の地位を占むれば眼前の風光天の美を示して惜しむとなく害なふとなし。人は二主に仕ふると能はず、肉と靈とに兼ね收むることは難し。吾等請ふ、其の一を擇び、平らかにして久しく、長くして安き、高潔崇高の天賚を受けん。如此くんば、相疑わざる信愛、二心合一、双躰同化、連々結托して、永遠渝はるとなけん。もし此の盟を破らば、わが決意もはや頼む可らず、此決意もし動かば、われは丈夫にあらず。冀わくは、全心を擧げて彼人に與へ、全誠を傾むけて彼人に寄せ、天地に恥ぢず永遠に劣らざる深遠無二の熱愛を、此の聖なる結合の裏に滿たしめん。肅しみて祈禱す、天に居ます父よ、其あわれみを垂れ、其祝福を恵み、此の可憐なる双々の二人をして終り迄で併行同伴せしめ玉へ。

○家に在るもの家を忘る

國を去つて國を懷ふと切、家を離れて家を慕ふと深きは、人の常なるを、朝たに號令して夕べに生命を忘るゝ身には、物の哀れこそ一きは深かるべけれ。

試ろみに、家を出でゝ多日、わざと歸らじと心に決して、何事かの戰かひに臨み見よ。朝々夕々の無意味なりける感觸は今や悉とく意味を生じ、更ためて感謝し、又更ためて悔ゆる所ろのもの多くあり。

久しく浴するものは、湯の温かきとを感ぜず。常に携提する

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

所ろの手足は、其の存在をすら忘る。茫々たる世界、一個安住の地を與へられ、義務、權利、邊幅、遠慮の觀念を沒して、同躰倶存の幸はひに浴し、一視共救の助けを交はす。久しふして之に慣れ、新たに、其の惠福を謝せざるが故に、時や偶たま來りて、われを警醒す。

此故に、法師戀歌多く、獨夫ホームを論じ易し。孝子もとより孝を知らず、忠臣豈に忠を解釋せんや。大道のすたれて仁義あるを憶はゞ、世にホーム論少なきは、豈に一憂の中、一喜の餘地を存せずや。

情に深き佳人血を吐きて一句を申すらく。忘れねばこそ思ひ出さず候と。ホームを憶はざるとき、即はち尤ともホームに樂しむの時か。

○鐵血宰相の今日このごろ

全世界すべて渠を疑ふときも、たゞ一人その心の侶となりて信じ慰さめ勵ましたる、前の老宰相鐵血翁が終生の同伴者は、今や、渠を遺して先づ逝きぬ。ビスマークと云へば、天下を聳動して恐懼せぬものあらざりし英雄も、祖父の心地して看護したる少年王に一朝容易すく搖り落され、老獅怒つて山林に入り、憤號の聲、一時はすさまじかりしが、老の怒り脆ろくも溶けて、破顏一笑の目出度事、近頃の慶事ときゝしに、彼の賢夫人は、今まや忽然として失せたり。秋風蕭條の天、末路の英雄をして恨殺せしむ。遙かに、之を念ふて、同情の涙なきものありや。

○可憐女と自ら名づけし人へ

扨て苦しきは妾の心にて御座候言ふにいはれず腸斷へんと致し申候一日として快よかりし日なく床は常にしきつめにて昨日一寸と起出候へば今日はまた一層あしく候眞とに尤ともの道理一言かへす言葉なく最とものの事とは思ひ候も私の心知る人なく知られてはならず悲しき限りに御座候云々の文に決心を示し最後の事を問はんとする可憐の人よ。人世に義理の柵あり、情けに水火の衝突あり、一と度び之に掛り之に觸るれば、行路途絶して斷崖千丈の心地し、世上にありと云ふあらゆる苦腦は、悉とく吾が爲めに集められしものかと思はるゝ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ほどなれども、異日醒がへつて之を観れば自から餘裕なきにあらず、幸福なきにあらず、今は物事左るものと勘辨し、豫かじめ將來の落付を信じて、こゝ一過渡を何如にしても過ぎ玉ふべし。後にて、顧りみれば、後山の白雲にして、自づから慰さむる所ろも出でべきか。只だ〳〵此の所ろ、盲となり聾となり啞となりたる心地して、眞一文字に走せ過ぎ玉はんこと、然るべしとこそ存ぜられ候。

○某女があわぬ苦心と云ふとに付き

古き歌にも其こゝろは盡しあり、わざと音信を絶つの苦痛は、言ひたきとの更に増すのみにて、千万無量の情海の水、くみてつきず、干してつきず、すくふに由なく、流すに途なく、たゞ〳〵溢らせ漲ぎらせ、天に達する迄で汎濫するの外あらざるものなり。かゝる際の心得は、互ひに疑はざるにあり、疑がふときは、彌いよ苦しく彌いよ堪へがたし。正さに、その上の交はりを憶ひ起し、心のひめ事を珍重し、死する迄で信じて渝わらぬと思ふこそ、唯だ一つの慰さめならん。其の外に慰さめべき途はあるまじくと存じ候。

○年の終りに數を回顧す

年の終りに臨みて、今更の如く感ずるは、微を積んで、多となし、細を集めて、大となすの道これ也。一年の元旦は、回顧すれば、昨日の如くなるに、日々一日を重ぬる間に、既に三百六十五日を過したり。此の間だ、もし一日々々に勵行して止むとあらざりせば、今は即はち三百六十五倍のものを得たるなり。たゞ、此の事なかりしものゝ今日には、依然として一物も遺らざるべし。

或人の計算によれば、一圓の金に年五分の利をつけ、利倍の法をもつて、百年間其儘に貯蓄すれば、百年の後には、一千三百三十三圓餘となるべしとなり。左れば、はじめ若し十圓ならば、一萬三千三百餘圓なり、はじめ、百圓ならば即はち十三萬三千三百三十餘圓なるべし。

貯蓄の恐るべき如此し。之と同じき割合に、利子に益するの高は、知らざる間に、巨大の額となるべし。故に、人は、平素、貯蓄利殖の念、一日もゆるかせなる可らず。年の暮に至りて、ことに此の道理を明らかにすべしと云ふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

評論

事業論

事業そも〳〵何ものぞ。唯だ是れ境遇に處したる「我」の足跡にして、必竟一枚の皮膚、一片の骸骨に過ぎざるものに非ずや。況んや、之に寄するの人の評價をや。高しと言ひ、低しと言ふ、はた何ほどの値ひかある。

事業に當るものは、戰かひに臨むが如し。當時やうやくにして思慮周旋すとも、多くは夢中樓閣を畫がくに異ならず。現に事業に當るの戰場に於ては、瞬速無意識にして、裁決自然ならざる可らず。養ふ所ろは、平日にあり。施こす所ろは、「我」なり。「我」の躰、其の印跡をのこす、是れより以上、豈に事業の價格を左右するものあらんや。

好んで事を迎え、平地に波を起さんとすれば、爲す所ろ自から無理ならざるを得ず。無理にして過當の事に任ぜんとすれば、自から矯僞ならざるを得ず。茲に於てか、事業を困難なりと言ふもの生ず。

我を施こして、我に在るものを供ふ。我を顯現して、我が得たるものを獻ぐ。成敗は、自然の數なり、巧拙は、蔽ふべからず。斯の如くして、事に臨まば、綽々たらざらんとするも得んや。

此故に、事業に當るものは、或る意義に於て之を輕ろんぜざる可らず。之を輕ろんずとは、優柔惰慢に流るるの謂ひにあらず、局促として迫まるとなきの謂ひ也、僞飾して利鈍を秘くすとなきの謂ひ也。

もし夫れ別に忠愛の情を養ふと懇ごろにして、天命の威を感ずると嚴莊ならば、事業に當るの赤誠、其根本に於て油然として自から生ずべし。既に、此の所ろに於て涵養するとあらば、計査勘定の末に於て、豈に齷齪として憂思するとを要せんや。

某の英詩に、「歌ひつつ活動す」の一句あり。われ、深く此の情を美とす。敢て放埒なるにあらず、敢て圖鹵なるにあらず、敢て輕率なるにあらず、敢て無責任なるにあらず、敢て器械的なるにあらずして、而して能く事業に當るの工夫自づから

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にして存せずや。事業もとより輕ろんずべからずと雖ども、亦太はだ重んずべからず。須からく、渠をして當然の地に立たしむべし。

國家及帝室に關する基督教

國家及び帝室に關する基督教徒の議論は、從來餘りに一徹に出でたり。其の同主義なるによつて一徹なるは、頗ぶる可なりと雖ども、同樣外國の歷史を讀み、一概に外國の敎政衝突に學ぶ所ろありて、則はち直ちに基督敎の立場なるものは必らず是也と識覺し來りしに由るものとせば、寧ろ是れ先入の習慣に誤まられたるものに非ずや。

抑そも、國家及び帝王の權義を如何んかすべきやは、基督の未だ曾て特別に敎訓せざる所ろ也。但だ夫れ、神を敬し、人を愛し、仁を盡し、義を成すとは、其の大ひに說法薰化したまふ所ろなるが故に、既に我國家となりたるの國家に對しては、之に奉公献身し、既に吾帝王となりたるの帝王に對しては、之に盡忠致誠すべきことを敎示せらるゝこと極めて嚴重なりと雖ども、抑そも、如何なる國家か之れ尤とも宜しく、亦何如なる帝王の權能か之れ尤とも正しきやの問題に係はりては、基督の毫も敎へざる所ろにして、基督敎の亦毫も關係せざる所ろ也。

故に、國家及び帝王に對する基督敎の關係なるものありとせば、たゞ之に對して至誠を傾盡し、事忠奉公に献牲すべきことを敎ゆるの外なし。智斷、權義の事に至つては、一に社會學、政治學の論明すべきもの也。基督敎は、たゞ其の論明確定したる所ろの義の宜しきに隨ひて、善を盡すべきことを求むる耳。

此故に、國家及び帝王に對する意見の如きものに於ては、所云基督敎徒の間に、種々の異論あるを當然の事とす。もし餘りに一徹にして、餘りに一定せば、これ或ひは、該敎傳來國の歷史に固泥して、愚かにも、基督敎の形骸を其精神として誤認し、偶たま、異邦の社會學、異邦の政治學を、宗敎の精髓中に混淆したるものなり。

日本の國家、日本の帝室に關する吾輩の見解は別にあるあり、たゞ方今の基督敎界、餘りに敎政の區別を混同し、自己の解釋を基督敎の釋解の如くにして、以て國家及び帝室と基督敎との關係は斯の如しなど斷定するもの多きを見て、密かに歎

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

息せると久し。然るに、今や、基督教界に於て、此種の問題に異論を生ずるの躰あり、之れ豈に進歩の徴候にあらずや。思ふに、國家及帝室などに關する問題に於て、基督教界大ひに分裂するにあらずんば、眞乎に宗教の本領を明らかにすると能はず。政教別途の確實なる端緒は、蓋し如此して初めて出で來らん。

回顧すれば、天地創造の歴史と、舊約聖書とを調和せしめんとし、もしくは、進化論と基督教との關係に汗水を流し、此の事の成敗如何によりて、基督教の大事とならんなど杞憂せし時代もありき。今にして、國家及帝王に對する基督教の解釋など言ふものも、亦た此類にあらずや。國家各發達の用あり、帝王各神聖の歴史あり、果して、社會黨、良きか、果して、立憲政躰、好きか、帝王果して神權ありや、無しや、此邊の問題は、豈に基督教が研究すべき領地の内にあらんや。基督教は、超然として、其上にあり、汎然として、其中にあり、國家、其宜しきを得て成立し、帝王、其地を得て威嚴あらんに、之に對して、誠意正心を盡すべき生命を與ふるもの是即はち宗教なり。宗教に豈に國家的、政治的の、一定したる形式なるものあらんや。

日本風景論

何如なるものも躰を備えざるとなく、躰を備えて善眞美を具せざるはなし。但だ通常の語法、連りに解剖分割して、遂に物の本觀を害なふ耳。

美や、何ものにも存す。何ものにも存するは、天の恩惠なり。ひとり世人此恩惠に浴するとの多少あるのみ。地下到る處ろに水あれども、井を穿たざれば、酌むもの稀なり。天上光線遍滿すれども、星の燦めくにあらざれば、望むものあらず。世に詩人なるものありて、僅かに一種の美を凡俗の爲に歌へば、世人則はち覺とる。覺とる、太はだ佳なり、たゞ如斯きを以て限りて美の態となすときは、蓋し誤まる。蚯蚓を研究すると四十年、面壁すると五十年、もしたゞ之を以て智識意念の事として、之に絶妙の美顯現したるとを識らずんば不可なり。凡そ何如なる事物か、美なからん、人の樂感して吸引せらるる所ろ、則はち美存す。科學者の美あり、軍人の美あり、貪商の美あり、狠狐の美あり。

然るを況んや、理學豈に美と相ひ反かんや。理學者の實驗

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は、詩人の旅行と左も似たり。發見する所ろ日々新らしき美あり。土をひねり、石を碎き、卵を割り、血を照らす所ろ、燦爛として、美か丶やぐ。之を理の美と云ふ。

惜しむべし、理學者、大率ね歌ふと稀れなり。こ丶をもて、凡俗、理の美を聞くと稀れなり。甚だしきは、學理進歩して美感退ぞくと云ひ、反つて文明の風景を殺ろすとを歎くものあり。これ皆な理學者の歌わざるが故なり。否な理學者歌はざるにあらず、凡俗、能く理學者の歌ふを聞くと能はざるに由る也。

冀はくは、明断の學理を得て、之を通常の詩歌にうつし、科學とポエトリーとを婚配せしむるの人あれかしと望まれたるに、志賀矧川子は、適當に、恰好に、其の需めに應じ、玆に精査多年の一大著作日本風景論を公けにせられたり。

靜淵子、此書を讀んで激賞措かず、下段の評文を草す。乃ち掲載して、該書の紹介となす、

瑯琊雪是故園雪　故園春亦瑯琊春。

馬をさへながむる雪のあしたかな、

日本風景論を讀む

靜淵

我邦、國家の組織愈々益々整然として、國民の能力更らに數十歩を進めんとす。誰か故國の盛運を祝し、風景の洵美を稱せざらん。如今軍國特に多事、古來未曾有の際に當り、日本風景の洵美論は、志賀矧川君によりて發表せらる、之れ豈に偶然のことならんや。何人か之を歡迎し、之を愛讀せざる者やある。顧ふに從來、我風景の洵美を稱せる名所圖會、名勝記の類、坊間に多々之れありと雖も、未だ此書の如く引用の豊富なる、立論の正確なる、文字の鮮麗なるもの、余は斷して之れなしと云ふを憚らず。著者は江山の洵美を叙すると共に、必ず先づ其所因を學理的に解説し、他邦の風景と相比較して以て日本の風景の優勝なる所以を明かにせり。故に之を讀下する間、恍惚として風景の美妙に醉はしむるのみならず、山川草木昆虫禽獸、地形地勢の理を能く了解せしむ。眞に之れ美術的地文學と謂つべきなり。我が天然の美を稱せんと欲する者、必ずや座右に供ふるを要す。

日本の風景、果して何が故に美なる、著者は之を四大部に區分して解説を試みたり。左に其要旨を摘錄して未讀者に紹介せん。

（一）日本には氣候、海流の多變多樣なる事

吾が日本や寒溫熱三帶の間に據在し、寒熱兩海流の會所に當り、變風、季候風、恒風の三風域に跨る、氣候の偏差多樣に半熱帶、溫帶、半寒帶、寒帶を併有し、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

造化の萬象、其の開闔變化の狀、昇降奇正の形、生育殖養の功害が日本の內に鐘む、且つ日本の地形は北の方、朝鮮半嶋より滿州の寒帶平原に通じ、西比利亞寒帶平原に入り、南の方沖繩群島より印度支那、南洋諸嶋と相應接するが故に、生物の如きは、寒熱兩帶のもの相錯互す。日本國民の氣象を涵養するに足る松柏科植物は國中到る處に之を看、禽鳥類に到りては、寒熱帶よりする者皆日本に集合し、寒より熱、熱より寒に去來する者、皆日本を以て經過所となし「鵲の渡せる橋」の如くす。昆虫類も多種に、特に蝴蝶の如きは、五百餘種の中百七十餘種は、日本に翩翻す、日本の花、亦其の種類、眞に多々、濃淡相競ひて亂開す。

著者は此間、日本は松柏科植物に富めるを叙し「是れ日本人の性情を感化するもの、何ぞ漫に英吉利人をして其の槲樹、蘇格蘭(スコツトランド)人をして其の山毛欅、佛蘭西人をして其の落葉松、伊太利人、西班人をして其の橄欖を誇稱せしめんや」と云ひ、「日本は松國なるべし、櫻花國と相待たざるべからず」と云ふが如き。讀下して意氣自ら昂然たらしむるものあり。

(二)日本には水蒸氣の多量なる事

四面繞らすに大瀛の水を以てす、水蒸氣の多量なる知るべし、故に其現象は曙色となり暮雲となり殘煙となり、百花亂發するの候に到れば霞となり、卯の花くだしとなり、五月雨となり、虎の涙雨となる。冬季に入りては雪空をなし、雪もよひをなし、雪おこしをなす、東山道の春、百花一時に競發するは、冬季中蓄弥の多量の水蒸氣に涵養せられ內心欝勃、春來溫度の激昂に刺戟せられ輙ち發奮するに因る東海道の初夏、新秧勃然、鮮綠滿目。日本をして米產國たらしめたる、植物の蒼翠秀潤なる、柑の日本に繁昌する、茶の日本の主產物となり、富士、大井、天龍諸江の夏間流水の淺々たる等の所因は、皆之れ水蒸氣多量なるに因る。山陰道北陸道の夏、白山の雪、針木嶺山道の雪の降夏に至るも歷々として存するは、水蒸氣多量の現象。紀南半島、四國の南半、九州の秋、北海道の冬、各々美觀を呈するは、皆之れ水蒸氣多量の感化。所謂蜃氣樓、颶颱、岩石の奪敗の奇觀共に同一理。

著者は之を叙する間に、東遊記、名所圖會、弓張月等より數多の例證を引用し、而かも彼等は現象の實際を言ふに止まりて、妄誕の理窟を存するを警醒一番し、理學的に諄々として解說する所、眞に精細を極むるものと謂つべし。

(三)日本には火山岩の多々なる事

吾が日本や實に北來南來兩火山脈の衝突點に當り、火山の存在するもの無慮百七十個、而して全國表土の五分の一は火山岩に係る、是れ日本の景物をして洵美ならしめたる主原因。朝鮮の地質の多くは原始期、太古期に係る、支那の北方の一面無慮四万二千方里の所謂黃土なるもの、我が火山岩國の淨山澄水の比すべきにあらず。そも山岳、特に名山は人性を點化し、高邁にし、神聖にするもの。而して名山は火山の別稱なり、所謂名山の標準は一、山の全體は美術的體式と幾何學的體式とを調合安排せるもの、二、然れども一山中の境遇は變化多々にして且つ不規律なるもの是なり。是れ正に火山にあらずや、富士山の如き實は全世界名山の標準、而して日本の火山及び火山岩の粹は、千島列島にあり、

著者は之を詳述して北海道本島の火山（千島列島より連續せるもの、後方羊蹄山彙に屬するもの、渡島山系の東脈）より本州東北の火山（中央火山脈、西岸火山脈、寒風山火山脈）に及び更らに中部日本の火山（富士山火山脈、立山火山脈）を叙し一歩を進めて南日本の火山（日本海火山脈、白山火山脈、阿蘇火山脈、霧島山火山脈）に至れり。一々諸山の性質形狀を精述し、遂にラボックが英吉利の風景を艶說したるの言を引き來りて、英國には火山岩の一大山だになく、日本は英に於ける所を悉く網羅し盡くして、更らに之に加ふるに天地間の「六」者たる火山の普遍を說き「浩々たる造化が其の大工の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

極を日本に鍾めたり」と斷定せり。眞然眞然。

（四）日本には流水の浸蝕激烈なる事

> 日本の地形、幅狹く丈け長く山脈は海岸線に並行して國の中央に連續す、四周なる大灘の水より發上せる水蒸氣は雨霜、氷雪、泉、瀾水、河流となり三角形の頂點より急激なる斜面を直瀉して下り來る、日本に於ける流水の浸蝕激烈雄快なる固より然り、

斯くて著者は、火山岩、花崗岩、石灰岩等に於ける浸蝕を叙し、之に伴へる結果に及び、更らに流水の浸蝕に伴へる他の現象、湖水、海水の浸蝕に及べり。

以上は著者が所謂、日本風景の洵美なる所因の、四大部の一小部分を抄錄したるに過ぎず。又附錄としたる「登山の氣風を興作すべし」や用意周到、精緻至緻の文なり。最後に慷慨悲壯の文字を以て、亞細亞大陸地質の硏鑽を日本の地學家に勸め「誰れか吾妻嶽上、濺ぐ所の鮮血を拉して之れを崑崙の山嶺に濺ぐ者ぞ」と慨す。何ぞ其の言の切なるや。

終りに雜感と題して、花鳥、風月、山川、湖海の詞書に就て叙述す。富士山は名山の標準なる理由の如き、詩文、俳諧、繪畫は沒理學とならずして、理學と調和適合せざる可らずと注意する如き、素より同感を表すべきもの。要するに本書は、志賀君得意の好題目、其の組織の整然たる如きは、君が曾て出したる「地理學講義」に於て既に一班を知るべく、其の文章の如何の如き業已に世上の月旦にあり、我輩又何をか云はん。余は只管に世上に愛讀者の多からんとを望むのみ。

余は此書を一讀、二讀、三讀して愈々益々我が天然の美妙を觀ると大なると共に、平生私かに信する所をして更らに、堅からしめたるものあり。其の範圍素より多岐、今爰に盡すとを得ず。僅かに其の一二を叙して擱筆せん。

美學上の論は暫らく措き、社會上の事に屬する一二に止めん余はバックルの如く、天然の境遇にのみ重きを置きて、人生社會の盛衰を觀んとはせず。然れども一般の社會學者が業已に認むるが如く、社會現象は天然の境遇の影響を蒙るとの著大なるを信ずるものなり。志賀君は日本風景を叙するの間に日本人の自然崇拜を說き、又伊太利の文人畫師が、古往今來、山嶽に對しては常に悒鬱隱憂なる觀念を以て待ちたる所因は其の山嶽の凄涼慘憺なるにありと說き、歐米文明の淵源は果然火山岩國に在り、吾が日本亦た火山岩國の天職として、東洋將來文明の淵源たらざるべからずと論じたる如き、實に余輩の同感して止まざる所。而して余は日本の歷史を繙きて、其の變遷する次第を察する每に、吾が國躰の特殊と吾が國民の特質とを外にしては、實に吾が日本の天然の美の恩澤に思ひを寄せざるはなし。何が故に之を云ふか。

前述せる如く、天然と社會的現象とは密接の關係ありと雖も未だ必ずしも天然にのみ重きを置くを欲せず。然れども吾が國の佛敎の今日の如く萎靡として振はざる現象は、實に天然の境遇より影響せらるゝことと大なるを信ずるなり。佛敎は我が國の文化の進步に與て力ありき。されど將來に於て、少なくとも稍久しき今後に於ては、正しく衰頽するものなるを信ず。宗敎の如きは古代に於て盛んなりしが故に、今代に於て

も隆んなるべしと信ずるは大なる誤りなり。夫れ社會の進步未だ幼く、國家の機制、整然たらざるや、一主義一學說と雖も非常の影響を與ふ、而かも文運隆盛、智識愈々開け道德益々進むや、凡百の學說主義を容れて尙ほ綽々餘裕あるものなり。之れ史上見易きの事實。

翻つて天然に對する觀念を見よ、古代に於ては天然に服從し之を崇拜し之を恐怖す。其の美の如き野蠻人の之を感ずるものありと雖も、未だ今日の意義にて云ふが如く、眞正に天然の美を快感するとなし。故に美感の進步は多くは文化の進步と比例すと云ふべきなり。之を以て如何なる宗敎の組織にても、古代に於て最も隆盛を極むる所以は、智德進步の程度低く、快樂を得るの要素、少小なるによるを知るべし。

試みに我が佛敎の盛衰史を見よ。眞に佛敎の盛んなりし時代は、天然の美を感ずると少なきの時なり、社會錯亂して鎭靜せんとするの時なり。國家隆盛の運に向はんとして、佛敎の隆んなりし現象を見ず。小乘的佛敎は彫刻術を進め、密敎は繪畫を進め大乘敎は詩歌の優粹に與て力ありしとは、素より疑ふべからず。而かも佛敎の詩歌に及ぼせるもの、多くは無常、寂寞、無氣味、厭世等の觀念なり。啻に天然の美を詠するものの少なきのみならず、專ら主觀的空想に耽りて世を果敢なみ天然を厭倦するとを勸めたるもの多しとす。されど見よ、天然の美は、浩々として整定あり、佛敎は盛衰常なく、今や廢頽に傾きたり。是れ實に自然の理なりと云ふべし。

何となれば、文化盛運に達せは一主義一學說によりて、徒らに動搖せざる、是れ所因の一なり、我が邦天然風景の洵美なる、是れ所因の二なり。佛敎の本旨をして我邦に行はんとする者は、大に誤れるもの、然り、果然變化して今日に來れり。彼等が日本の佛敎、變化したる佛敎を擴張せんと或は可ならん、然れとも其の眞の敎理は、我邦に適せざるなり。

之を我風景の點、即ち天然の美より觀察せんか、我が風景と佛敎とは全然相容れざるものなり、右に敍述したる志賀君の風景論を見よ、日本や自然に進取的なり、開發的なり、樂天的なり、春夏秋冬四季の景色は、日本人の進步するに從て益々其の美を感ずべきもの。而して佛敎や小乘に於ては、現在を厭はしめ大乘に於ては、餘りに個人的修養に偏し、進取にあらずして退步なり。世に哲學を弄ぶものありて、佛敎の深遠なる道理を慕ふ、斯かる輩は今日の印度、西藏の地を欽仰するもの、是れ我が邦土の山川の洵美を放擲する輩のみ。西藏の佛敎を見よ、聞くが如くんば佛敎の本旨の極めて進步したるものなり。世人我佛敎の史を以て佛敎の本旨と認むるは、蓋し誤れるものなり。要するに我風景と佛敎の本旨とは、純然正反對に立つもの、佛敎の本旨を失ふもの却て盛んに、業已に日本化せられしと寔に天然美の恩澤と謂つべし。

山嶽の美なく殆と赤裸々たる印度の地、伊太利の詩人の如く厭世の思想を發生せしめたる素より然り。造化の美を鐘めたる　皇土に於て、印度、西藏的佛敎の衰頽せる、自然の勢ならずや。佛敎を奉ずるもの願はずんばあるべからず。

厭世的佛敎傳はり、世祿的忠君主義の儒敎傳はり、歐洲的耶

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

蘇敎傳はると雖も、我が國躰の千古異變なき、國民の特質依然として存するは、實に之れ日本風景の洵美、天然の恩澤ならずや。吾が國民の自然崇拜の念、隆んなるは、依て以て愛國心をして强大ならしめたるもの、亦是れ我が天然美の然らしむる所ならずや。我邦以て東洋將來の平和を策すべく、以て東西文化の精粹を掬すべく、以て東西道德の相違を調和せしむべく、以て眞正なる宗敎を發達せしむべく、以て國民の隆盛を期すべし。我が國躰の特殊、我が國民の特質、我が天然の洵美は、日本の同化力を養成したる三大要素、吾人之を保持し、吾人之を守護して始めて、我が國民の進步を期すべきなり。

此の同化力養成の三大要素に背反するものは、政治、法律、宗敎の何たるを問はず、之れ我が國民の破却すべきものならずや。我が云はんと欲する所、多岐にして盡きず、他日を期して爰に擱筆す。以上は日本風景論を讀下する間に感じたる一二の點を記したるのみ。

○日本の十大勝算

同人

是れ加藤博士が今回の事件に就き我れには十大勝算ありて彼れには十大敗算ある所以を述べられたるもの其所說や既に我が識者の多數が認め或者は將に認めんとする所のものと云つて可なり細目は暫らく措き凡そ余は博士と同意見なり。

但し細評は故あるを以て止む。

○近松門左衛門

停春樓主人、愼重綿密の筆を以て巢林子を傳えんとす。巢林子は比えば沙翁の如し。其人は万人皆な之を知りて、其生涯は万人能く審びらかにすることなし。主人、博ろく讀み細かに考えて、遂に此の傳をつくる、苦心尋常ならず。

主人が刻苦精勵の跡は、其の「德川家康」に於けると同じく、歷々徵すべし。もし遺憾ありとせば、其の餘りに學者的にして、其の歸納の餘りに順序立ちたるにあり。之れ即はち能く明晰たる所以にして、同時に即はち餘りに平凡に、餘りに器械的たらんとするとあるの所以なり。殊に、情熱火の如く、文思花の如く、變幻鬼の如く、直覺神の如き奇才を寫すに於ては、取分け物足らぬ心地のせらるゝ節あるは、蓋し此邊の故か。

然れども、緻密なる著作表を製し、名作七十種を通讀して其一班を示すが如きとは、主人が格外なる勞苦として讀者の深く感謝する所ろ也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○札幌基督教會歴史

札幌の宮部君、其の教會歴史を寄贈せらる。此の教會は、稀有の歴史を有し、最初、獨立主義を以て勃興し、現に尚ほ此主義を維持せる、本邦唯一の無宗派的日本獨立教會なり。格外の趣味を以て讀過すれば、左の如き記事あり、

クラーク氏一年間の契約を以て黒田長官の求に應じ明治九年の夏東京に着し黒田長官と共に玄武丸に剳して本道に航す船中に於て長官クラーク氏に語るに人物養成の事を以てし且つ學生に道德を教へ其品行をして益々方正ならしめんとを托すクラーク氏輙ち諾す黒田長官クラーク氏の容易に之を諾せるを怪み問ふて曰く足下何に由て道德を教へんと欲する乎クラーク氏曰く我輩歐米人の德を養ひ行を建つるの書は唯だバイブルあるのみと黒田長官驚ろいて曰くバイブル——バイブルは我國嚴禁の書、學生に教ゆ可らずとクラーク氏曰く余はバイブルを持て高尚なる道德を教へ深く人心を感化する良書あるを知らずバイブルにして教ふ可らずんば余は長官の命に應ずると能はずと黒田氏は曰くバイブルは決して學生に教ふ可らずと。

是れ明治八九年の頃の事なり。

此他、美以教會が、四百圓の返濟金を此小群羊に強ひたる如き。大島氏が斷然洗禮を授けたるに宣教師輩の苦情を申出でたる如き。遂に同氏に按手禮を授くるに至りてわざ／＼之を組合教會に屬せしめたる如き。蓋し今日之を回顧して慚汗背に流るゝことを覺ゆる人多かるべし。

欄燦

なみだの記（上）

左の一篇は近頃重き病の床にある叔父が日記の中、夏休後の事にて涙あるところのみぬきとり、拙き筆にてうつせるなり。此篇小説よむ積りにてよまば文も詞も拙なくていやになるべけれど、げにある事と思へばいかにあはれなる！妾は涙ある姉妹の同情を得むとするの外他に望なきなり。

在仙臺　さ　し　子

午后十時の鐘なりてより、はや二時間もや經たらむ、舍監室の燈火きえしは一時間ばかり前なれば。同舍の生徒は一日の課業に疲れたるに、今夜は親睦會ありて、強う運動したれば、ね心地よしとおぼしく死にたるやうにねむりぬ。窓の下の芭蕉の葉秋風にそよぎ、木の葉散りて窓を打つ音、あはれなる孤客の夢を破るに、鴈さへゑば鳴きて、なかむばかりに思ひ亂れたる心に一層の悲哀をあたへぬ。嗚呼思へば、すゝまぬ心をはげまして故鄕をいで、學校にか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

へりしは一月前なりき。やう〳〵風寒くなり、身躰も固くなりて、勉むる人のよき時節になりたるに、余は此地にかへりてより、學校へは未だ一日も出席せず。日々病にかこつけ、友を訪ふことは更なり、訪ひくる人にあふことをせぬも多かり。常ならば大川といふ名と、交際家といふことゝは同じものゝやうに思はるゝまで人に交り、人に愛せらるゝに、一ヶ月このかたは日は一日より世に遠くなりゆけり、今夜も親睦會にこよと、親しき友達の强てすゝむるをも拒みて、獨り孤燈の下に泣き暮しつ。

余が日々閉ぢ籠りおるを、人々は夏休の中にみまかりし母がためなりと思ひ、孝子の名を與ふる人もありときけり。余はかゝる貴き名を人より受くるをげに有りがたく思へど、不幸にも心に耻づるをいかむせむ。余を杖とも柱とも頼みて、十七年の間寡婦となりて、世にありとあらゆる艱難をなめたまひし母の死、いかでわが心を强く打たざらむ。されど余に世の無常を敎へ、果敢なきことを悟らしめたるは他に故あり。余は之を人に語るを耻とは思はず。

思ふにわが生涯の中、今年の夏休ほど有望なりし時はなく、亦未來にもあらむとは思はれず。七年の普通科も數多ある同級生の中にて、第一席の名譽を負ふて卒へぬ。明年よりは大學に入り、法學を修め、他日世にいでゝ、國のため、君のために働かむ、母をも安樂させむ、理想の女王をもわが前にひざまづかせむなど心に畫きて、眠られぬ夜も多かりき。卒業式終りたる翌日、日頃の勞を休め、兼て實地人情をも目擊せむと忍びて仙臺を去り、日光に遊びて日本美術の壯麗なるに驚き、東京に遊びてわが日頃の豫想にたがひて帝都の繁榮ならぬに失望し、大磯の海岸にて波に打たれ、江の島の社前に獨り月に嘯き、更に大磯にかへりて五六日の後、余は古鄕の姉より手紙を得ぬ。披き見れば、母數日前より恙ありとの事を報ずるなりきも、其終には、微恙なれば鄕省せぬもよからむとあれば、心にもかけでありしが、其翌朝又も姉より、母の病甚だよからねば速に歸れよと電報しおこしぬ。此時余は未だ床の中にありしが、衣をきるも、顏を洗ふも食するも、空しく時を失なふやうに思はれて、たゞちに旅装をとゝのへ停車塲にかけつけぬ。

品川にて車をのりかへ、東京の後をとほりて赤羽につき、上

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

野の車を四時ばかりまちて、宇都の宮につきしは夜の十一時頃なりき。翌朝五時の滊車にのらむとしてしばし待つ間に、金と滊車切符とを入れたるパース何時か奪ひ去られぬ。嗚呼如何にすべき、金は惜からねど切符なければ行くにすべなし。母の重き病に一秒時も惜まるゝに、古郷より送らむ金を如何でかえ待たむ。すべつき、思ひ極まりて、停車場の片隅に行きて泣きつ、時間といふ者によりて動き、つゆあはれ知らぬ車掌は早や滊車に進行の命を下せり。

如何に泣くも失ひし金と、切符とは出でべくもあらず。余は日頃の注意深きに引きかへ、今朝のみ斯く不注意なりしを深く悔ひ、如何にせむかを考へぬ。たゞちに思ひ付きたるは時計を賣らむことなりき。

斯く思ひさだめたる頃は九時過ぎて、上野より仙臺に行く第一列車が來る僅か前なりければ、之に乘らむとて人々多く集りけり。余は待合所の椅子の上にのぼりて、右の手に高く時計をさゝげ、母が病のことも、今朝の不幸のことも、人々の前に聲だかくのべぬ。さて下りて一紳士の前に行き、今も述べし如くなれば、あはれと思ひてわが時計を買ひ給へといふに、彼は嘲るやうなる口調にて、否と答へき。斯くて五六人の人々に乞ひしも皆拒まれぬ。其次は十八九なる少女と、乳母ならむと思はるゝ婦人なりければ耻ぢていはざりき。椅子の上にて演説せし時、あはれある目にて我顔をまもり、あつき耳にて我言葉を聞きしは此少女のみなるやうなりしと。ア、場中の人々皆木石にてやありけむ、一人もわが願をきかざりき。あまつさへ余を掏兒ならむと、傍の人にさゝやくもあるを、其聲のもれてわが耳に入りし時、余は怒る勇氣もうせて再び泣きぬ。わが最後の望も空しくなりけり。

心の迷なりけむ余が泣きし時、美しき少女の目にも涙あるやうなりき。余は耻をも忘れて先に乞はで殘せし少女の前に行き、時計をといひし時、滿坐の客哄然として笑ひつ。わが擧動のあまりにおかしかりければならむも、さては情なき人々なる哉と余は思ひぬ。天の使の如き少女は傍の婦人に何やらむいふやうなりしが、婦人は余に問ひていふ「君はいくばくを要し給ふにや。」「仙臺までの切符なれば三圓あらば足らむ。」と答たる時、少女は突然いふ。「仙臺にや行き給ふ。我等もまた。」「さらばいとめでたし。仙臺には多く我友もあれば、そ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

こにて借りたる金を返さむ。」といふ時、婦人は起ちて切符を買ひ、余に與へしが上等切符なりき。余が驚きの色顔にや現はれけむ少女はいひぬ。「われ等は松島に行く者にてはべり。されど今夜は仙臺にやどらむとぞ思ふ。我等は婦人のみにて保護する人もなければ、君いなみたまはずば同車に乗らむ。」「そはわが望むところなれど、わが時計は三圓より多く價するとも思はれず。仙臺の友も餘裕なければ多くの金を借らむは覺ぼつかなし。」と答へたる時少女は顔をおふて笑ひ、婦人はただちにいふ。「時計は用なし。金を君に捧むは、始めより姫の心なれば。」少女は之につぎていふ。「君我等を保護して、安らかに仙臺につかせたまはゞ、深き恩報ひ奉らむによしなきに。」余は女神のなさけに三度涙をながしつ。

汽車出發の時は來りぬ。人々先を爭ひて狹き切符撿査所を出づる時、余は以前の不幸なるに引きかへ得々としてあゆみぬ。數分前は人に金を乞ふ身なりしに、今は上等室に乗る紳士なれば。

さて室に入れば吾等の外には一人の客もなかりき。座定まり、車も運轉しはじめぬ。少女は柔かなる椅子に斜によりかゝりて、心地よげに婦人と語り、余は離れて默しておれり。恩人の名を知らむとして其名をとひしに、彼は袖よりさゝやかなる名刺を出して與へき。名刺には松平道子とのみあり。婦人は日光の聞きしにまさるところなるを少女と語りあひ、やがて松島の景色如何にとゝはれたる時、余は日光の美は多く人工にあれど、松島の美は天然にありと答へぬ。かくて談話も志げくなりて、わが口もやう／＼輕くなり、婦人のとふがまに／＼吾國元をかたり、今年は仙臺の學校にて普通科を卒へたれば、明年よりは東京に行きて大學に入らむといひし時、婦人はいふ。「姫の兄君も大學の生徒にておはせり。明年は卒業なれば獨逸にや行き玉はむ。」東京生れの口輕き婦人は更にとはずがたりぬ。妾が姫の家にめされしは、二十五年の前にて、姫の兄君が生れたまひし翌年なりき。その頃は今とかはり、華族など男爵などいふものなかりしも、姫の家は公義の一門なりし松平家の枝流なれは、あまたある國主の中にも、上のおぼえ殊にめでたかりき。妾は此姫生れたまひし後も、乳母となりて今日までめされぬ。嗚呼世が世にてあらば、姫が今日の身の上如何にめでたからむに、華族男爵はいみじけ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れど主家の家中にて、大殿より高き位にある者さへあるやうなるあさましき世となりたれば、姫も妾一人をつれて、此さみしき旅をなしたまふにこそ。」姫なる少女は手づから氷水を調合して、余と乳母とに與ふるを彼はおしいただき、感極まりて更にいはむとせしを少女はとゞめつ。

げに服裝といひ、言葉といひ、禮儀作法といひ、余は最前より彼をば世に捨てどころなき女學生なりとは思はざりしも、名族の姫君――今も猶ほ官途にありて、名望高き松平家――わが母方に緣由ある松平家の息女ならむとは思はざりき。余はわが目のあまりににぶきに呆れ、且つはかゝる名族の恩人に對して禮なかりしをいたう耻ぢて、身のをきどころなきやう思ひぬ。かくて坐中は語る人なければ靜肅となり、車のしきる音のみになりけり。

此靜肅を破りて少女はいふ。「何故君は今年東京に來りたまはぬにや。」余は家の都合あるよしを語りたるに彼はいふ。「さらば明年は早く來りて、わが兄とも交りたまへ。東京に來りたまはゞ、我家の近にや宿りたまふ。我家にといひたけれどそは望み得ぬことなるべければ。」その時すゞしき風、窓より入り來りて、少女の髪を亂せしが、えならぬ匂風にそひ來りて室にみつるを、余は蘭の氣の如く吸ひき。(完)

樹だま集

孤衾

泡鳴子

ほんに こゝろ に 恨らんで 見ても、
まことは 須磨 の 浦人 に
おもはれたさ の おもかげ も、
誰れに むかはん 秋の月!
みがけど、いまは、あまざかる
高麗野 の たより 待つよひ の、
ゆめ に おどろく ひづめ の 音も、
さめては、濱 の 松風 に
こたふる なみ の ちら〳〵と。
むかし の あと の しのばれて、
胸 には 浮かぶ わがつま も
さぞや いくさ に いさむらむ。
から國人 を たひらげて
歸へらん 日 をば、夜もすがら、
おもひこがれて 亂れがみ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

石切り

某戯作

あま雲の 高く こほりて 聳えたか、
いはほ の 山 の 谷そこ 深かく、
樹だま に ひゞく 石切り の
おと も あぐみて やすらふところ。
飄然 として すみぞめ の
坊さま ひとり 來たる を 見て、
こゝろ に おもひ あたりけむ、
はッと 手 を うち、われ は そも
かく 石切り の わざ を 爲し、
百年 たてども 切り敢へず、
千年 たてども 切り敢へず。
かぎり ありとも 見へば こそ。
いッそ うき世 を よそに 見て、
苦も なく、憂さ も なか〳〵に、
なれにし 具 をば なげすてゝ、
坊さま と こそは なりにけれ。

あはれなるかな、牛山木嘗美矣。
一朝削髮、如彼濯々也。
その 濯々あたま に 似あひたる
てら あたらしく まつらいて、

つれに こゝろ を すますなる
椽がは ちかく 端坐 して、
夜 にし、あさ 北、晝 みなみ、
かはる てん氣 を ながめつゝ、
何に をか さとりそこねけむ。
ふッと こゝろ に うたがひ の
くも が 起こる は 天 の 病氣、
わが身 も やまひ 生じなば、
いかに か せん? これのみ は
ほとゝぎす にも 聽きがてに、
さけ と 豆腐 が くすり でも、
おあし が かたき の 山さか を
五里 三里 取りに 行かれず、
何んでも 慾 が 第いち と、
つひに 醫者 と ぞ なりにけり。

草根 木皮 こッぱのかは、
みな 愚老 が 配劑 に 適す。
拾ろッても ある こんなもの、
一ふくろ いくら とは、
あゝ、有りがたい 造物主!
世界 の 人 に 下劑 を のませ、
腹 の くだり切ッたとき、
米屋 を 兼れて 見たならば、

さぞ 儲かろ とで あろ。
どれ 見舞ひ に まゐろか さ、
羽織 たか帽 いかめしく
市中 を まはろ 折からに、
暴風 にわかに 起こり、
おのが 同士 の 吹きまくられ、
かけ込む も あり、ころがる も あり。
大事 の あたま うばゝれて、
おまけ に 着もの よごしたら、
いのち に かゝろ 醫者 の 耻ぢ。
これでは、いッそ、人の目 に
見えぬ かぜ こそ さひはひ さ、
つひ に かぜ と ぞ なりにけり。

宇宙 の 森羅萬象 天籟地籟、
萬竅 に 怒號す かぜ はしも、
天津大神 の ひりかける
おなら なるかも、とこしへに
かげ なく、香 なく、耻ぢ なく、
はゞかり なしさ 自由自在。
あをうは原 を 蹴飛ばしつ、
おほ山木々 を 踏み倒ふし、
野べ を たひらげ、草 を 薙ぎ、
あばれまはッて ぶつかつた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いはに向ッて、これヤ、目くら！
おれの通るが見えぬかと
なドれば、いかッて、おのれがだ。
開闢以來居すはッて
びくともせぬを知らないか？
なる程、こちらが見えなんだ、
怪我せぬうちにいはのごと
かたくならんと、かたまりて、
つひにいはとぞなりにけり。

こころが、おのがおしりをば、
かちり〱のおとにつれ、
欠くものあるに氣づいて見れば、
おのれも昔ておぼへある、
石切りなり、南無三寶
萬事まくドッたり！
矢張りはドめに歸へらんと、
もとの石切りとなりにけり。

~~~~~~~~~~

この思

空花庵主作

あしたとなれば　日はてらむ、
ゆうべとなれば　月いでむ、

あさなゆうなの　この思
　月にもあらず　日にあらず。

葉末のつゆは　風にちり、
　野もせの花は　霜におつ、
つゆと花との　この思
　霜にもあらず　風ならず。

うれしといひて　うちわらひ、
　かなしといひて　なきむせぶ、
うれしかなしの　この思
　涙にあらず、ゑみならず。

姿をみては　戀ひまたい、
　聲をきゝては　うちまよふ、
まなこと耳の　この思
　情けにあらず、こひならず。

矢丸の雨に　身をわすれ、
　きらめく太刀に　たほれふす、
いくさの庭の　この思
　ちしほにあらず、身にあらず。

君のためにと　ふるひたち、
　國のためにと　きりはらふ、
忠勇義膽の　この思
　譽れにあらず、利にあらず。

* * * *
* * *

高しとほとし　この思、
　淸しうるはし　この思、
天とつちとの　わかちなく
　神と人との　けドめなし。

~~~~~~~~~~

水

白衣子

水に　色なし
　瓣上　露滴　宿て　花　紅を染む
水に　耳なし
　波上　鐘聲　過て　面　紋を顯す
春の曙　秋の夕暮
　何れか　心の　深からぬ
秘密の　露を　おかしめよ
微妙の　聲を　きかしめよ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

博物館を觀るの記

(二)ノ上　　無　光

諸氏が畫といふものに付て甚だしき誤解をなし居らるゝ事は諸氏の力足らざる故には相違なきも、是れ維新前より由來し來れるものなれば、其罪を盡く諸氏の背上に負はするとは、素より事情に暗き者のする事にして、余の取らざる所なり。諸氏は即ち余が第一回に陳べたる如き社會に在て教育せられしなれば、今日子弟を教育するにも多くは昔日と轍を同ふして、同じ弊害を増長せしめつゝ居らるゝのみならず、悲しき事には諸氏自身自家の缺點を見出すと能はず、其上社會も亦餘り正しき忠告を爲さゞるが故に、自ら信じて善しと思ひ居らるゝことは又無理ならぬ處もあるなり。

前にも述べたる如く、一部分一物、殊に一筆一彩の間、或は簡單なる草畫に於ては、諸氏の巧妙なる技術は實に驚嘆に堪へざるものあるなり。此點に於ては余は正直に白上す、余は諸氏を以て大家と崇めんとす。然れども少しく區劃を廣めて、一の樹木、一の石、一の山、一の人物花鳥に至り、若くは此草と彼草の關係、此森と彼山の釣合、此色と彼色の配合、此人物と彼人物、此水流と彼動物との如き交互の工夫に及び、若くは一歩進んで、線の點に於て、濃淡の點に於て、彩色の點に於て、右方と左方、上部と下部、前景と中景と遠景、主と客等の如き一圖の全躰上、箇々の物を統轄する腦力に至るに隨ひて、追々に拙に赴き愚に陷りて、何の積りにて畫かれしにや理解し兼ぬる點少なからず。諸氏は數萬の畫工中に傑出して、而かも經驗と鍛錬を積まるゝ爰に數十年、此間の年月那邊に向て其腦力を痛め居られしや、深く其事情を知らざるに於ては此不思議決して説明し得べからざるなり。

總して畫を稽古するものとしいへば(獨り畫のみならざりき)筆の使ひ方、線の引き方より始めて(是は甚だ善し)追々に手本を臨寫し粉本を摸寫することに進み(是も善し)それも少しく出來るやうになれば、出來るたけ其流派の粉本を澤山摸寫して澤山貯ふるなり(是も悪きには非ず)斯くして或年月を經れば腕も追々に定まりて、其流派に似たる筆法、彩色法、隈の染め方をチャンと呑み込むに至り、其時腦中及畫裏に貯へたる粉本の圖様を編綴取捨して新畫を作り得るやうに成る、是に於て其人は先づ一人前の畫家となるなり。此年月は殆んど十年にも亘るべけれど其鍛錬の單純なる驚くべきなり。何故に人の顔は如此に、山水は如此に、樹木鳥獸は如此に畫くか、何の積りにて太公望を畫くか、赤壁の圖を作るか、なぜ蘭は鳳眼に、竹は介字に、梅は女字に似するか、其邊に迄も腦力を用ゆるは古人に對して僭越なる事として、頭より禁ぜられしなり、畫が好きだから畫く、粉本にあるから畫く、是は斯く彼は彼の如くするもの、只工夫すべきは其末を集むることにてありしなり。斯くして畫家たるを得るものあらば、夫れ何の思想の涵養、何の學問の研究をか要すべき、筆墨上の才あるものは直ちに立派なる畫工たるを得しなり。此の如き有様なれは粉本を所持せんことは畫家の第一に骨折る處に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

して、其頭腦を古人の境に入らしめんと務むる等の如きは、全く厄介物として放棄せられたり。只人間の自然力にて、知らず〳〵の間に幾分か、位置とか配合とかいふもの位の事の發達し居るに過ぎざるなり。非常の天才を有せる人は、此獄窂を脱け出で丶覺束なき光を遠き彼方に認め得ざるに非ず。されども少しく複雜にして大仕掛なるものに至れば蹟き倒れて自から惑はざるものあること稀なり。

されば今日の大家が如何に自から認めて好畫を作り得たりとするも、以て世界に誇らんとするの抱負を持するとも、其根底に於て一大缺點を有することは素より止むを得ざる事にして、眼識あるもの丶慥かに認めて遺憾とする所なり。諸氏自身は夫れにても詮なきなり、余は諸氏が眞の傑作を出す能はざるを責むるものにはあらざるなり。唯政府の無學にして、往年態々(わざ〳〵)歐洲迄も巡覽し來りしにも關らず、眞の繪畫なるものを覺る能はず、徒らに野心ある米國人の誘ふ所となりて自から知ることなく、諸氏を認めて眞の大畫家となし且つ決して出來得べからざる無理注文をなせるが如きは、余が深く嘆する所なり。眞實にいへば、政府が諸氏に對する今回の處置は、外面甚だ親切なるが如くにして、內面は甚だ不親切にてありしなり。

◎◎次に言ふべき事は、諸氏の畫に生命の無きことなり、即ち畫題の撰擇と、畫題といふものに對して抱ける思想の誠に哀れむべきことなり。こは前述の缺點ある諸氏にしては尤次第の事にしていふ迄も無きとなり。

諸氏が畫題の多くは何の意味をも顯はし居らざるなり。諸氏は或る一の感念を顯はさんとして或る一の畫題を取られしにはあらざるやに見ゆ。此點に付てはやはり盲目的にてあるなり。此點に於て諸氏は美術家としての價値は甚だ低きなり。此腦力に於ては俗人と左程の程度を異にせざるなり。譬へば綺麗に彩色を施す爲めの美人畫にして、美人の爲めに美人を畫かる丶に非るなり、又何の爲めに美人を畫かるといふことなきなり、又美人とは何の事なるやは一向無頓着にてあるなり、幾分か考へられしにもせよ、市井の所謂美人なるもの丶外は諸氏の腦中に在らざるなり。多くは單に粉本にあるの故をもて、そを畫題とせられしにてあるなり。

或種の人が諸氏の畫を嘲て摸様畫なりといふも、其嘲の由來する所を味ふれば、決して一概に暴論なりといふ能はざるなり。諸氏の畫を一見したるとき、如何なる勢力の余等の腦中に入り込むや。春の風は余其暖きを知る、冬の風は余其寒きを知る、諸氏の畫に至ては余其何たるを感受する能はざるなり。諸氏の畫題は商店の屋號、旅館の樓名、粉黛の名詞と選ぶ所無し、畫かれしもの、畫かれし景況は外面甚だ佳なることと紅葉館といひ鹿鳴館といひ小町水といひ或は娼婦の名の若紫といひ海綠といふが如きなり、其眞を見るとき豈に夫れ驚かざるを得んや。畫題は畫家の最も苦心する處にあらずや、畫題は畫の目的に非ずや。畫題とは單に或る命名を下し、或る景況を畫くことに非ず、其畫中に保有する一の眞勢力をいふなり。此勢力なくんば他に如何なるものあるも、其畫は生

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

命なきなり、其畫は畫題無きなり、其畫は目的なきなり、されば其畫は倒底畫にてあらざるなり、美術家の畫にはあらざるなり、其畫は紙鳶の畫と何と異なる所あらんや。畫題なき畫は人の住まざる空屋の如きなり、外觀甚だ美なるも寥として人氣(ひとけ)といふものなきなり。余は遺憾ながら諸子の畫を以て美術家の畫と讃する能はざるなり。

諸氏の中、一二の人は髣髴として畫題に心付かれたるなきに非れど、余が見る所にては、未だ幼稚なる生徒といはん外なし。畫題といひ、畫の主意といひ、生命といふ如き點に於ては、毫も教育(大なる意味に於て)を受けられざる有樣なれば是も詮なきなり。其一二人が大勇猛心を以て此處に達せられたるは最も賀すべき事にはあれど、大日本の美術家としては未だ悲しむべき事に非ずや。

以上の諸點は實に此處に陳列せられたる繪畫の重なる缺點ならんと信ず、(其一部分に於ける用意等に至ては殊更に述ぶるを要せざるなり)是等の諸點は繪畫に於ける腦髓と五臓なり(美術家の品性等の如きに至ては今は言はざるなり、唯畫術としての要部を擧げたるに過ぎず)是等の畫にして是等の缺點ありとせば日本の繪畫界は憐む可きの限りに非ずや。

然れども若し我日本の繪畫界をして、其缺點を僅かに自省して、眞正の方向に進ましめば、最も望多きものとならん。是等の缺點あるにもせよ。余は諸氏の畫才を心より讃賞するものなり。諸氏が今舊來の暗處を去りて光明の國に向ひつゝあるとは、諸氏の畫之を證明しつゝあり。後進者は諸氏の畫を見て戒め且つ覺る所のもの多きなるべし。諸氏は自身にも在來の繪畫の餘り狹小なりし事は知りそめられしなり、されども如何にすべきやといふ點に於ては未だ得られざるなり。是等の畫は、余は斷言す、諸氏の試驗畫なり。舊世界と新世界との間に流れ居る亂雜といふ川あり、諸氏の畫は今此川の中流に立ち居るなり、そは夜を放れて朝に移らんとする時のあけぐれにてあるなり。諸氏は或は是れ丈にて終らん、後進の人は諸氏に依りて向岸の新世界に渡り、朝の日光に暉らさるゝを得ん』

されば政府は此點に於て諸氏の畫を此處に陳列せしか、然かりしならば幸福なりしならん。されど此處は博物館の參考室に非ずや、無言の間に諸氏の畫を以て日本繪畫の摸範を認めしとを表はせるものに非ずや。是等の畫は諸氏の稽古畫なり、決して諸氏の眞實の畫にはあらざるなり。政府がかゝるものを日本美術として世界博覽會に出品したるのみならず、博物館に迄も陳列せるは、甚だ不思議の事なり。如何にしても博物館に陳列したしといふならば、諸氏が平日畫けるものゝ中にて最も勝れたるものを選ぶに若かざるなり。余は屢々其等の中に於て諸氏の傑作と稱すべきものを認めたり、そを陳列せんに、今日の繪畫中最も勝れたるものとして見るときは毫も差支なかるべし、政府の處置に付ては余は倒底那邊に於ても左袒(たん)歡迎すること能はざるなり。

余は次回に於ては、余か責任を盡さんが爲め、一步を進めて實際に當り、是等の畫の一々に付て明に其好處と缺點とを指さし、余か信ずる限り正直公平なる批評を試みんとする者なり』

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

因に一言すべきものあり。批評の事たる容易の業に非らず。善と稱し惡と貶するもの、人に依て各其標準を異にせざる事無し。故に明確に自己の意見を發表せんとする者は、豫め自己の主義とする處を明確になし置かざる可らず、然らずんば無責任の駁評に過ぎざればなり。（殊に余が如き一般とは異なれる意見を有するものに於ては益々必要なり）余が此批評の如きは苟くも我邦大家の諸作、殊には博物館の列品に對するとにしあれば、最も余が旗色を明かにせざる可らず。然れども余が本誌に意見を吐露するの日猶ほ淺くして未だ百分が一を盡さず、さりとて批評と共に我繪畫上の意見を精密に述ぶべきにも非ず。其邊責任を重んぜざるに似たりと雖とも又已を得ざるに依る。讀者幸に諒せよ。

○友を失ひて秋の月を觀る

浦のなみ子

よべとたゝけど答へせぬかの友は死の川瀬をうち越へて今は雲井の空にこんぱくやうかむらん千尋の底に靈や沈むらん世のしばしの夢と知りながらあまりのうたてさにわがこゝろさながらうき雲の空にうかべるおもひして散り行く花に香のみ殘れるあはれさよ秋のあはれはこゝろあるもなき人もたれかつきせぬ思に沈まざるまして秋月すみ渡り今は万戸人聲おさまり河の流もねむるてふ眞夜中に過にし友のおもかげをおもひ煩ふぞかなしけれ定めなき世ぞ露にしほれて草葉に宿るわが命先だつも後るゝも何れか水泡ならぬどあはれ心の友を失ひて秋の月見るこゝろのほどぞかなしき。

片々

◉京濱女學校連合市況　去る十一月十日東京青年會館に催ふされたる京濱間同主義女學校連合市の結果は左表の如し、

◉征清軍恤兵慈善會決算報告

一金高參百七拾八圓八拾六錢

（一）收入金參百七拾八圓八拾六錢

（甲）献金高貳百拾六圓九拾壹錢

一　金五拾圓　頌榮女學校生徒献金
二　金四拾參圓　女子學院生徒献金
三　金四拾壹圓五拾錢　フェリス女學校生徒献金
四　金參拾圓　明治女學校生徒献金
五　金貳拾圓貳拾壹錢　青山英和女學校生徒献金
六　金拾貳圓貳拾錢　普連土女學校生徒献金
七　金拾圓　駿河臺女學校生徒献金
八　金五圓　女子授産場生徒献金
九　金五圓　女子獨立學校生徒献金

（乙）會費收入高壹百四拾九圓拾五錢

一　金參拾壹圓　明治女學校ヨリ受取ル
二　金參拾圓參拾錢　女子學院ヨリ受取ル
三　金拾壹圓參拾錢　頌榮女學校ヨリ受取ル
四　金拾壹圓貳拾五錢　女子授産場ヨリ受取ル
五　金拾圓五錢　フェリス女學校ヨリ受取ル
六　金九圓六拾錢　東洋英和女學校ヨリ受取ル
七　金九圓拾錢　立教女學校ヨリ受取ル
八　金六圓貳拾五錢　女子獨立學校ヨリ受取ル
九　金參圓參拾錢　青山英和女學校ヨリ受取ル
一〇　金貳圓五錢　普連土女學校ヨリ受取ル
一一　金拾五圓九拾五錢　木村夫人ヨリ受取ル
一二　金拾圓　慈善會場ニテ收入

（丙）雜收入高拾貳圓八拾錢

一　金四圓六拾貳錢　慈善會喫茶店ノ利益
二　金參拾錢　慈善會手遊店ノ利益

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三　金四圓參拾錢　三井夫人及三越洋服店ヨリノ寄贈品ヲ賣リテ得タル收益高木村夫人ヨリ受取ル

四　金貳圓五拾八錢　王子孤女學院生徒ヨリ寄贈セラル

五　金壹圓　ミス、メラーヨリ寄贈セラル

（二）支出金參百七拾八圓八拾六錢

（甲）金參百五拾圓　征清負傷將士宛赤十字社へ獻納

（乙）金貳拾八圓八拾六錢　諸　費　用

◉圍てる對マクリーン　の事件に付、本號に譯載すべき豫告は此に果すこと能はず、圍女史が答辯をも併せ掲載ありたしとの請求に應じたれば也。

◉婦人矯風會役員改撰　今月第一土曜日東京婦人矯風會の年會あり、役員の改撰せられしもの左の如し、

新任會頭及び副會頭

會頭　本田さた子　　副會頭　雑賀あさ子

書記及び會計

書記　高野あい子　　會計　原田さき子

委　員

十一點	下山こたけ子	八點	潮田ちせ子
十點	津田はつ子	十點	服部ちよ子
九點	山岡けう子	九點	横井たま子
九點	根本さく子	九點	竹越竹代子
八點	山路たれ子	八點	元良よれ子
八點	美山さよ子	八點	小島せい子
八點	石川ます子	七點	小田川ゆう子
六點	寺尾あい子	六點	小枝はる子
五點	塚越こう子	五點	德富ひさ子
五點	藤田きよ子	五點	安藤ふみ子

◉教育時論が女子教育　の方針を確定すべしの社說は、二個の標準によつて之を定めんと云ふにあり。曰く、男兒をして義勇奉公の觀念を實行せしむるの趣旨に基づくもの。曰く、實業振興の趣旨に基くもの是也。

◉島根縣師範校女子部　亦た廢議あり。縣會は兩三年前よりの廢止論を固執し知事は常に之に反對し、再議に附し若くは認可せずして原案を執行し來りしが、本年の縣會に於て又々之が廢止を議決したり、其理由とする所に云く、

（一）女教員は地方の風習に適せざる事（二）女生徒は學力不充分なるが故に學期も長く且費用夥多しと云ふ事（三）久しく教員の職に居る能はざる事（四）一校を管理する能力なき事（五）女教員の需要少なき事（六）女子簡易科の不適當なる事。

◉普國改正女子教育案　同國に於ける女子教育奬勵會の盡力空しからず、文部大臣は遂に女子教育に關し、新なる規定を爲せり。是まで同國に於ては、女子は小學校教員並に女子のみを敎ふる中學校の教員試驗に應ずることを得たるのみなりしが、高等の女學校にて重なる地位は大抵男子に占められたり、然るに新規則によれば、女子と雖是等の重なる地位につくことを得ることゝなれり。但其前に二回の試驗を經ざるべからず、即第一回には小學校教員試問若くは教育學試驗を受け、第二回には殆獨逸の大學校の試驗と程度を同しくする試驗を受けざる可らず。然れども女子は大學に入學することを得るにあらず、故に其準備の教育は、私に教師につくか、ベルリンのヴィクトリヤ書院にて學ぶか。又はゲッチンゲンの大學に於て、特別に女子に與ふる講義を聽聞せざるべからず、未來に於て女子は大學に入學し得るに至るべきやと云ふに、今日の所にては、到底望なきに似たり、又女子の高等教育には、總て羅甸語希臘語を課せず、九個年間は全く普通の科目を修めしむる者にして、即國語、歷史、文學等を主とせり。（教育時論）

◉近時の佛界を慨ふ　と題する成田志林第二號の社說に云く、ゆにてりあんの勃興こそ佛教界に少なからぬ影響を與へしものなるべけれ、蓋し彼の曖昧なる旗幟に思想の薄弱なる佛教家をして迷はしめ、彼の模糊たる宣言は精神の幼稚なる僧侶をして感ぜしめ、遂に佐治實然をして佛教界を離れしめ、中西牛郎をして歩を彼に移さしめ、加ふるに山高く草深き高野の學林生をして書を彼に送り意を彼に同ふせしめたることすらありしにあらずや、畏るべきは、ゆにてりあんなる哉。次に言ふべきを眞宗の事とす云々。成田志林は成田にて發行するもの也。

◉大日本海外教育會　は去る六、七、八の三日を以て、東京青年會館に於て披露せられ、去る十六日を以て横濱に於て披露せられ、發起人諸氏は連日諸方に訪問遊說せられつゝあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

若松賤子譯著

感謝の美談（クリスマス） **祝ひうた** 新刊書

光、家の内に滿ちて、天使、幼な兒に生れ、麗質かゞやき、誠心きらめき、情け万物に徹す、美くしきと、愛らしきと、氣高きと、尊ときと、言はんかたなし。父母は爲めに淸きを增し、家は爲めに睦みを增し、近隣の貧者、太陽を望むが如し。十二月廿五日、高貴聖美、絕頂に達して、ほめ歌朗らかに、讃美洋々たる時、一生の極美をしめす。此の可憐にして、尊とむ可き一小女か言行こそ、クリスマスを祝ふ第一の教訓なれ。而して、父母の愛、同胞の睦み、貧者が生涯、或ひは感奮すべく、或ひは泣くべく、或ひは抱腹絕倒すべき人事悉とくあり、眞とに、一篇の絕好小說とや言はん。若松賤子、材を西國の名著に取りて、事を本邦の今日にあはせ、言文同致の平易なる文章にうつす。大人もとより讀むべし、小兒尙ほ玩はふべし。恐らく、クリスマス用に適好の書ならんとて、玆に新刊して世の需めに應ずと云ふ。

去る十日發賣、一册定價十錢、郵稅二錢

出版所	警醒社書店
取次所	女學雜誌社
關西賣捌	大阪福音社
賣捌	仙臺大塚書店

明治女學校生徒募集

◎各級とも欠員有之候に付入學を許す、月謝金一圓廿錢。

◎高等小學第三年卒業の學力ある者は無試驗入學を許す。

◎普通科は四年即はち高等小學卒業後三年にて卒業の筈。

當期出校教授左の如し

巖本善治　八木兼辰　小此木忠七郎　福迫龜太郎　呉くみ子　矢田きく子

星野愼之輔　犬養銈之助　島崎春樹　戸川明三　納所辨二郎　鈴木馨

鈴木弘恭　大和田建樹　池田四郎次郎　齋藤音作　吉住深山　竹内梅子

石川角二郎　ミス、スコット　塚本叉喜　塚本はま　神中いと子　五島千代槌子

俳諧史傳 全

和裝美本定價三十錢郵稅四錢

⊙小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』製本既成す、曾て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

⊙思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

⊙俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的叙情短歌の面目を構成す。

⊙其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を叙し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

⊙これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を橫溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奥に冥合せしむるに足らむ。

⊙若しそれ、一字苟もせず、一筆輕々に下さず、言々證あり句々據ろところあり、而も文章、平易簡明、叙記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

透谷集

菊版美本肖像入凡二百七十頁
十月七日發賣定價三十八錢

右は故北村透谷子が遺稿斷篇の散逸せんとを惜みて一册子となしたるものなり。子が轗軻窮愁の短生涯に於て筆にしたるものは悉く網羅蒐集したれば、子が平生の素志を惜む人はこの小集を愛讀せらるゝに吝ならざるべし。この册子厭世詩家と女性の一文に始まりて蝶の歌に畢る心機妙變の論あり、油地獄の評あり、歌念佛の評あり、三日の幻境あり、情熱の辭あり、哀詞の序あり、其他國民の思想を論し、富嶽の詩神を想ひ、情死をあはれみ、ゆきだをれを悲しみ、螢を歌ふ。其他淸深の文字少なからず。

發行所

神田表神保町六番地

女學雜誌社書店

看護法學習會規則

第一條　本會は婦人さして一般に日常心得べき看護法を學習するを目的さす
第二條　本會は講師さして醫學士高田耕安氏を聘す
第三條　會場は本鄕區東竹町卅四番地本鄕會堂さす
第四條　講義は毎日曜日午後一時より二時に至る
第五條　講習期限は六ヶ月さす
第六條　會員は年齡十五年以上の婦人にして普通敎育ある者たるべし
第七條　會員は雜役さして毎月金十錢を收むべし
第八條　會員は毎會出席するの義務あるものさす

本鄕區東竹町卅五番地村井知至氏方

本鄕會堂婦人會

婦人矯風雜誌第十四號十一月十一日廣告

◎本號には竹越與三郎氏の日本婦人の三世相さ題する演說あり◎雜錄には一劍万里生の支那婦人の生涯さ題する實驗談○英國前の總理大臣グラッドストン氏さ矯風問題○及び朝鮮の風俗さ題する注目すへき記事あり◎文藝には婦人文學者さして第一流の地位にある小金井きみ子氏の殊に我社の爲に起艸せられし故木澤一等軍醫の夫人の心を讀める新躰詩あり◎小女の爲には丈夫小女の手紙の爲に戰死すさ云へる面白き話あり◉其他雜報を讀まば一日して今日婦人の狀態に通するを得べく歐洲女報を一覽せは以て海外婦人の近狀を知るに足るへし◎本號には附錄さして陸海軍人の遺族を慰問せんか爲に特に作りたる廿ペーシの小册子あり冀望の御方は金三錢を投し給へば御配付申すべし尤も郵稅を要せす

雜誌一部代價金四錢郵稅五厘毎月一回發兌

麴町區上二番町三十三番地

婦人矯風雜誌社

文學界

第二十三號
十一月三十日發兌

○孤雁　こてふ
○アンゼロ　藤村譯
○秋窓夜話　鷗水
○落葉集　高安三郎
○みなつくし　孤蝶
○闇夜(完)　一葉

時文には日本風景論○近松門左エ門○ホルム氏逝く○臺灣志○初雁○松山鏡○文學雜誌等あり

弊社儀是迄發行所を下谷三輪町八十九番地に置き候處今般都合により左の場所へ移轉致候付ては今後弊社に於て發賣等可致候間原稿雜誌及ひ書籍等は更なり一切注文等弊社へ宛て申込まれたし

猶弊社左の場處へ移轉致候については今度更に文學界書店を開始し書籍雜誌等販賣可致且又女學雜誌社書店閉店致候につき特約の上同書店の書籍等は一手販賣可致候

發行所　東京神田南神保町十五番地　文學界雜誌社

農業雜誌

毎月三回(五ノ日)發行
第五百三十八號
十二月十五日發兌

日錄概略○馬鈴薯の說○柿樹剪定法(圖入)○雜報。蠶糸業大會の意見、各地農況、支那滿州の農產、種物分與報告等數件○官報。實業勵精者褒賞、獸病二件○寄書。早田稻作の實驗、土川植稻作實驗、各稻種試作成蹟、大麻の効用及適地、菊薯栽培の利益實驗、綿作に就て注意、春蠶鼠害豫防法實驗○問答。農家住宅の摸範、葉黑稻に就て、味噌早造法、麥飯の炊方○質問新題數件○春蒔蔬菜類種物定價表○內外有益菜樹其他苗木類定價表○廣告

農業雜誌定價○壹册價五錢郵稅五厘●半ヶ年分十八册前金郵稅共九十錢○一ヶ年分三十六册前金郵稅共一圓六十錢

發行所　東京麻布區本村町二百十七番地　學農社雜誌局

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省許可)

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	定價	郵稅
吾黨の女子教育	巖本善治著	一册十錢	郵稅二錢
木村鐙子小傳	同前	同十錢	同
公娼可減	同前	同五錢	同
教育講義	同前	同十錢	同
日本女學	同前	同五錢	同
文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十六錢	同四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同十錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同二十錢	無郵稅
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同三十錢	同四錢
善惡の岐	中島とし子著	同二十錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同五錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同十錢	同
兒育草	同	同八錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同十錢	同

新刊書籍

戲曲 **桂五郎** 阿波鳴門左衛門著 十錢 郵券二錢

高橋傳五郎 巖本善治編輯 五錢 郵券二錢

偉人物 山月子稿 同前

發行所 女學雜誌社

女學雜誌 前號目錄

◉社説
克終論
廿七年の天長節(隱花生)

◉隨感
昔しの吾友は●前生ありや無しや●新韓のかたり●復活の奇跡●神智靈覺●智慧の味ひ●父が子の爲に、犬馬となる時●王陽明が所謂「行」●躬行實踐は實物教授なり●獨嘯鬱錄(破默)

◉女學
女學界今後の大勢●女學校の裁縫教師●菊女と云へる方への答●悲しむべし、今の女學生●亭主鬱散錄(石翁)

◉評論
教界大勢論●基督教新教界●風雲大に來らんとす●法外の新撰組●宗教は保守也、又進歩也●一生面の診察●只た主動者を望む●西鄉隆盛傳を讀む●朝鮮懲毖錄を讀む●日曜墓參論

◉爛煥
悲哀の美と女性(布川靜淵)●糸ぐるま(空花)月を傷む(白衣子)●博物館を觀るの記(無光)●李鴻章(非上次郎)●原忠順君を悼むの辭、並に其の略傳

◉片々
京濵間女學校連合●闔てろ對マクリーン●前橋廢娼論者氣力●梅花女學校の此花●松田みち子の書信

女學雜誌定價表

前金	
壹册	金拾錢
一年前金	金壹圓

(無郵稅)

明治廿七年十一月十五日内務省許可
明治廿七年十二月廿四日印刷
明治廿七年十二月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工塲 (電話十九番)